

ねぷた・ねぶた祭りを支えるコミュニティの現状と展望

弘前大学大学院地域共創科学研究科

地域リノベーション専攻

コミュニティデザイン研究領域

23GC103

佐々木啓祐

目次

第1章 本研究の目的と方法	1
第1節 問題の所在	1
第2節 先行研究の検討	1
第3節 本研究の目的と方法	2
第4節 ねぶた・ねぶた祭りの概要	3
第2章 運行団体の実態、意識、課題	5
第1節 本章の目的と方法	5
第2節 運行団体の実態	8
第3節 意識調査の結果	17
第4節 現状の課題	25
第5節 クロス集計の結果	33
第6節 本章のまとめと考察	35
第3章 祭りの担い手の新たな取り組み	36
第1節 本章の目的と方法	36
第2節 各団体の活動事例	37
第3節 運行団体を越えて活動する人たち	42
第4節 本章のまとめ	46
第4章 考察	47
第1節 本章の目的	47
第2節 これまでの調査結果の整理	47
第3節 総合的考察	48
終章	49
第1節 本研究の要約と結論	49
第2節 今後の課題	50
参考文献	51

第1章 本研究の目的と方法

第1節 問題の所在

都市祭礼は、時代とともに変化しながら継承されてきた。しかし、少子高齢化や都市への人口移動、新型コロナウイルスの感染拡大といった地域社会の変化に伴い、活動の継続が困難になりつつある。2024年に毎日新聞社が行った調査は、都道府県が指定する無形民俗文化財のうち、担い手不足によって指定の解除や休止状態となっているものが31県で計102件に上っていることを明らかにした。

青森県の津軽地方を中心に行われるねぶた・ねぶた祭りも例外ではなく、担い手不足が課題となっている。その一例として、弘前ねぶたまつりにおいては、2010年の参加団体が84団体だったが、2024年には63団体に減少している。また、筆者の関わってきた五所川原立佞武多も町会を中心とした団体が減少している。そして、市民が祭りへの参加する機会が失われつつある。

祭りは個人の活動では成立せず、地域のコミュニティのなかで人々が協働することで維持されてきた。これを踏まえ、本研究では、各地域や団体、個人が祭りを取り巻く課題にどのような方法で対処しているのかについて調査・分析する。そして、祭りのコミュニティがどのように維持、継承されているかを明らかにし、今後のねぶた・ねぶた祭りを展望したい。

第2節 先行研究の検討

都市祭礼は、これまで社会学や民俗学を中心に多くの研究が蓄積されてきた。樋口（2014）は、祭礼を通じて形成される様々なコミュニティを総称して「祭縁」と表現し、地域の共同性について考察した。また、金（2006）は、都市祭礼におけるヨソモノの存在が祭礼の維持や発展に大きな影響を与えていることを明らかにした。武田（2016）は、都市祭礼における社会関係資本の活用について、資金調達の仕組みをもとに分析を行った。坂本ら（2018）は、茨城県土浦市の土浦祇園祭を事例に、祭礼を運営する地域住民とそれらを取り巻く任意団体に着目し、社会構造の変化に対する住民の都市祭礼への対応を検討している。そして、都市祭礼が持つ氏子町やその周辺地域のコミュニティを形成する機能の重要性を論じている。また、地理学の分野では、佐藤（2016）が京都祇園祭を対象に、運営基盤の変化について調査、分析を行い、都市祭礼の継承を論じている。

ねぶた・ねぶた祭りに関する研究は、まず弘前大学人文学部（1986）が、県内全域のねぶた・ねぶた祭りを対象に質問紙調査およびヒアリング調査、参与観察を行い、祭りの特

性や担い手の意識や行動を分析している。そのなかで、田中（1986）は県内の3都市の運行団体を対象にした質問票調査から、実態と意識を分析し各地域の祭りの特性を明らかにした。青森ねぶた祭については、阿南（2003）が参加団体の支持基盤や運行コースをもとに戦後の変容の過程を明らかにしている。さらに、高度成長期の都市祭礼について、地域社会との関係に注目しながら、変化の特徴を明らかにしており、その具体例の1つとして、青森ねぶた祭を挙げている（阿南 [2018]）。また、青森市で主に各町会を中心に実施される地域ねぶたについてはヒアリング調査および質問票調査をもとに現状を分析し、地域ねぶたの持つ機能や存続の課題を明らかにされている（佐々木 [2016]、佐々木 [2024]）。教育学の分野では、青森市と弘前市において調査が行われ、運行団体と学校との連携の必要性が論じられている（立田ほか [2009]、三浦ほか [2009]）。県内の学校を対象に質問紙調査が行われ、また、長野（2006）は、五所川原市の高校を事例に、ねぶた制作・運行に関わる教育実践の有効性を明らかにした。

このように、ねぶた・ねぶた祭りに関する研究の多くは、各地域で区別されて行われている。また、複数の地域を対象にした調査も実施から年数が経過し、現在の実態は当時の調査結果と大きく異なる可能性がある。また、現状の課題に対応した新たな取り組みや団体の枠組みを越えた個人の活動については触れられていない。そのため、改めて調査を実施し再検討する必要がある。

第3節 本研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究では、ねぶた・ねぶた祭りを支えるコミュニティの現状と展望を明らかにすることを目的とする。そのために、まず質問票調査を通して運行団体の実態や意識、課題を明らかにする。さらに、ヒアリング調査をもとに団体や個人の新たな取り組みを明らかにする。

(2) 研究の方法

研究方法は、主に質問票調査とヒアリング調査である。

まず、質問票調査については、青森市と弘前市の運行団体を対象に実施した。青森市は、青森観光コンベンション協会の協力のもと、地域ねぶた及び子どもねぶたに参加する47団体、大型ねぶた23団体に送付した。前者は26団体、後者は13団体から回答を得た。また、弘前市観光部観光課の協力の下、弘前ねぶたまつりに参加する団体のうち、63団体にメールにて送付し、12団体から回答を得た。質問内容に関しては主に、経費や参加者、祭りに対する意識、活動において苦労している点を尋ねている。

また、各団体の実態をより具体的に把握するため、複数の地域の運行団体、個人を対象にヒアリング調査を行った。

第4節 ねぶた・ねぶた祭りの概要

青森県では、津軽地方の全域でねぶた・ねぶた祭りが行われている。池上（1986）によれば、農村を基盤とした民俗行事の側面と、町部を中心に発達した風流的祭礼の側面の2つの流れが存在するとされている。本研究では、主に後者を対象とする。また、本節では様々なねぶた・ねぶた祭りの中でも、特に規模が大きく特徴的な2都市を取り上げる。

まず、青森市の祭りは「ねぶた」と呼ばれ、人形ねぶたを制作し運行する。また、市内で運行されるねぶたは、大きさと運行形態から主に大型ねぶたと地域ねぶたに分けられる。大型ねぶたは、8月2～7日に行われる「青森ねぶた祭」において市街地を運行するねぶたで、現在23団体が存在している。ねぶた本体の大きさは、幅9m、奥行き7m、高さ5mという規定があり、団体の多くは大企業のスポンサーに支えられている。その一方で、地域ねぶたは、7月～8月中旬にかけて青森市内の各地域で行われる地元住民のための祭りである。また、8月2、3日の青森ねぶた祭には、大型ねぶたの他に地域ねぶたの一部が「子供ねぶた」として参加する。団体数はコロナ禍以前までは増加傾向にあったが、コロナ禍から再開した後は2～3割ほど減少した（図1-1参照）。一方、子供ねぶたは長く参加団体数に大きな変化は見られなかったが、コロナ禍後は半減している。このようにしてみると団体数と地域の現状は必ずしも一致しているとは限らず、課題は各団体の内部に潜在化していると考えられる。

弘前市の祭りは「ねぶた」と呼ばれ、8月1～7日まで合同運行の「弘前ねぶたまつり」が開催される。運行されるねぶたは扇形が大半を占め、ねぶた絵師が制作を担っている。合同運行に参加する団体は、1980～90年代は60～70台を前後していたが、その後増加し続け、2010年には最高値の84台になった。この理由について、成田（2016）は愛好会などの有志の団体が増えたことが原因と指摘している（図1-2参照）。しかし、青森市の地域ねぶたと同様に、コロナ禍の祭り中止の前後で台数に大きな変化が生じている。

そして、以上の2都市の祭りは「青森のねぶた」「弘前のねぶた」として、1980（昭和55）年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。

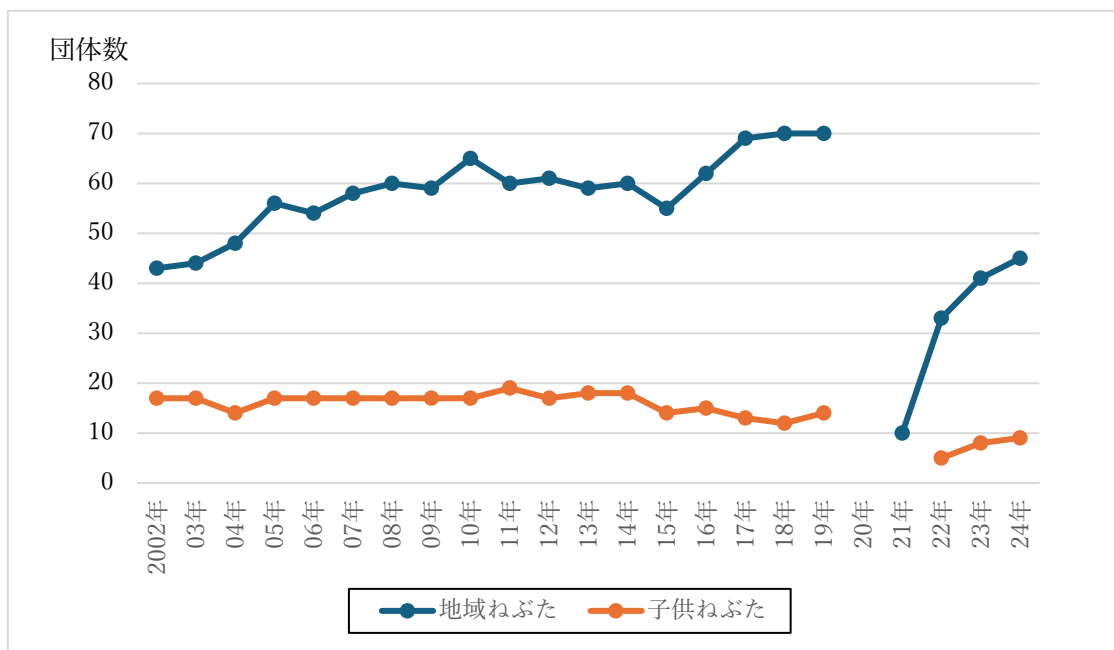


図 1-1 青森市の地域ねぶたおよび子供ねぶたの参加団体数の推移（青森ねぶた祭オフィシャルサイトをもとに作成）

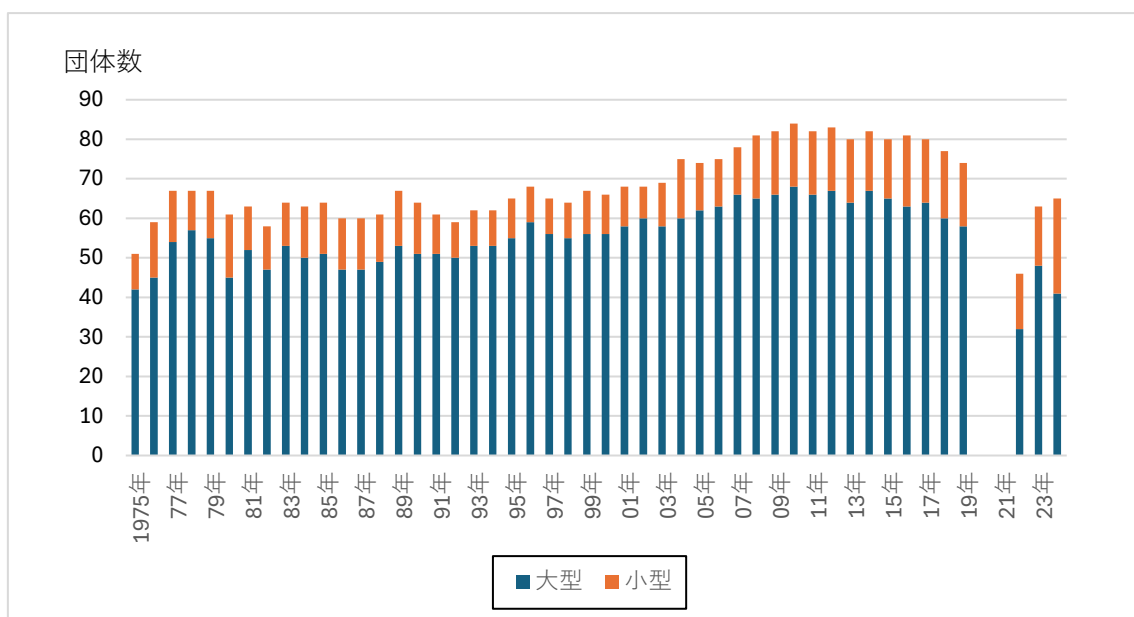


図 1-2 弘前ねぶたまつりにおける参加団体数の推移（弘前市〔2019〕および弘前ねぶた速報ガイドをもとに筆者作成）

第2章 運行団体の実態、意識、課題

第1節 本章の目的と方法

本章は、運行団体の実態と意識、課題を明らかにすることを目的とする。

調査概要は以下の表 2-1 の通りである。

2024 年 12 月 3 日から 20 日にかけて質問票調査を行い、対象地域は、青森市と弘前市とした。選定理由としては、祭りの規模が大きいことと、合同運行の他に町会を中心とした地域運行の実施が挙げられる。弘前市の運行団体について、当初は地域運行のみ行っている団体を含める予定だったが、対象を把握する方法がなかったため、合同運行の参加団体で対応することとした。青森市は、青森観光コンベンション協会の協力のもと、地域ねぶたおよび子供ねぶた 47 団体、大型ねぶた 23 団体に送付し、前者は 27 団体、後者は 13 団体から回答を得た。また、弘前市観光部観光課の協力の下、弘前ねぶたまつりに参加する団体のうち、63 団体にメールにて送付し、12 団体から回答を得た。全体の回収率は約 39%となっている。

内容に関しては、1984 年に田中が行った質問紙調査（田中 [1986]）にもとづき経費や参加者、祭りに対する意識に関する質問を設定したほか、自由記述欄では団体の工夫している活動や苦勞している点を独自で尋ねている。弘前市では、2009 年に三浦が田中（1986）と同様の趣旨で実態調査を行っている（三浦[2016]）。また、青森市の地域ねぶたに関しては、2023 年 12 月に佐々木が運行団体を対象に質問票調査を行い、結果が分析されている（佐々木 [2024]）。これらを踏まえ、今回の質問票調査に関する以下の分析においては、必要に応じて過去の 3 つの調査と比較し検討を行うものとする。なお、青森市の地域ねぶた、子供ねぶたについては、便宜上、両者を総称して「地域ねぶた」と表記する。

表 2-1 質問票調査の概要

調査対象	青森市の大型ねぶた団体(23 団体)	青森市の地域・子供ねぶた団体(47 団体)	弘前市の合同運行に参加する団体(63 団体)
送付方法	郵送		メール
回答方法	郵送または Google フォーム		Google フォーム
回答期間	2024 年 12 月 3～20 日		
回答件数	13 団体	27 団体	12 団体
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> ・設立時期 ・組織母体 ・会員に占める組織母体の関係者の割合 ・囃子手の動員方法 ・本体の制作、調達方法(青森大型、弘前のみ) ・囃子練習の開始時期 ・仮設小屋の設置時期 ・運行形態 ・祭りの経費、収入(青森大型、弘前のみ) ・当日の参加人数(青森大型、弘前のみ) ・運行の目的 ・祭りのあり方に対する意識 ・団体が抱える各課題の深刻度(経費、人材等) ・現在工夫していること(自由回答) ・現在の課題(自由回答) ・今後、取り組みたい活動(自由回答) 		

表 2-2 2023 年実施の質問票調査の概要 (佐々木[2024]をもとに筆者作成)

調査対象	2023 年、青森市の地域ねぶたを実施した団体(38 団体)
送付・回答方法	郵送
回答期間	2023 年 12 月 6～26 日
回答件数	26 団体
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> ・運行年数 ・次年度の参加予定 ・経費、収入 ・運行時の参加人数 ・地域ねぶたを運行する上で困ること ・地域ねぶた存続の意義 ・ねぶたの制作、調達方法 ・地域ねぶたに関する意見(自由回答)

表 2-3 2009 年実施の質問票調査の概要 (三浦[2016]をもとに筆者作成)

調査対象	弘前市の合同運行に参加する団体(84 団体)
回答件数	75 団体
調査内容 (三浦[2016]における記載内容)	<ul style="list-style-type: none"> ・ねぶた制作における専門家依頼の程度 ・祭りに参加する目的 ・祭り運行時の人員規模 ・準備制作時の人員規模 ・祭りの経費、収入

表 2-4 1984 年実施の質問票調査の概要（田中〔1986〕をもとに筆者作成）

調査対象	<ul style="list-style-type: none"> ・青森市の大型ねぶた団体(21 団体) ・青森市の子供ねぶた団体(20 団体) ・弘前ねぶた運行団体(61 団体) ・黒石ねぶた運行団体(79 団体) (※回収率 100%)
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> ・団体の結成時期 ・団体の組織母体 ・会員に占める組織母体の関係者の割合 ・規約の有無 ・会費の金額 ・会員数 ・会員の活動参加の実態 ・運行の目的 ・各活動の開始時期(会合、寄付集め、小屋掛け、囃子等) ・ねぶた制作における専門家依頼の程度 ・当日の参加者 ・囃子手の動員方法 ・団体が抱える各課題の深刻度(経費、各活動における人材) ・祭りの経費、収入 ・寄付協力者の内訳 ・祭りのあり方に対する意識

第2節 運行団体の実態

(1) 設立時期

調査対象の3地域における運行団体の設立時期は以下のようになった(図2-1)。青森市の大型ねぶたは、全体的に時期が分散しているが、8割以上が戦後1980年代までに設立されており、新規団体は少ない。その一方で、地域ねぶたは1990年代以降の設立が半数以上で、特に2010年代に設立された団体が全体3割に上っている。その中には、一度途絶えた町会のねぶたをまちづくり協議会や大型ねぶたの団体の協力のもとで復活した事例がある。弘前市は、1970年代、1980年代が特に多いが、90年代以降の設立もいくつか存在する。このような結果から、運行団体は伝統的なコミュニティを長く保持するだけでなく、時代に合わせて変化し続けていることが読み取れる。

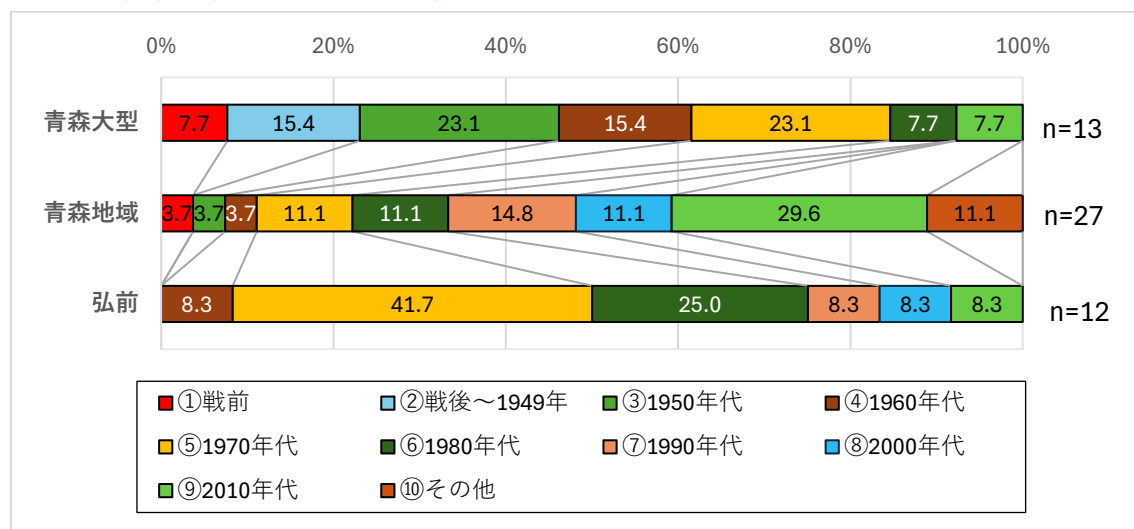


図2-1 運行団体の設立時期

(2) 運行団体の組織母体

青森市の大型ねぶたは、約6割の団体が企業を母体としており、他の選択肢と比較して圧倒的に多い。地域ねぶたは町会が中心となって成立している。弘前市は、地域ねぶたと同様に町会を母体とする団体が半数程度だが、学校を母体とする団体と特定の支持基盤を持たない団体がそれぞれ全体の3分の1を占めている(図2-2)。

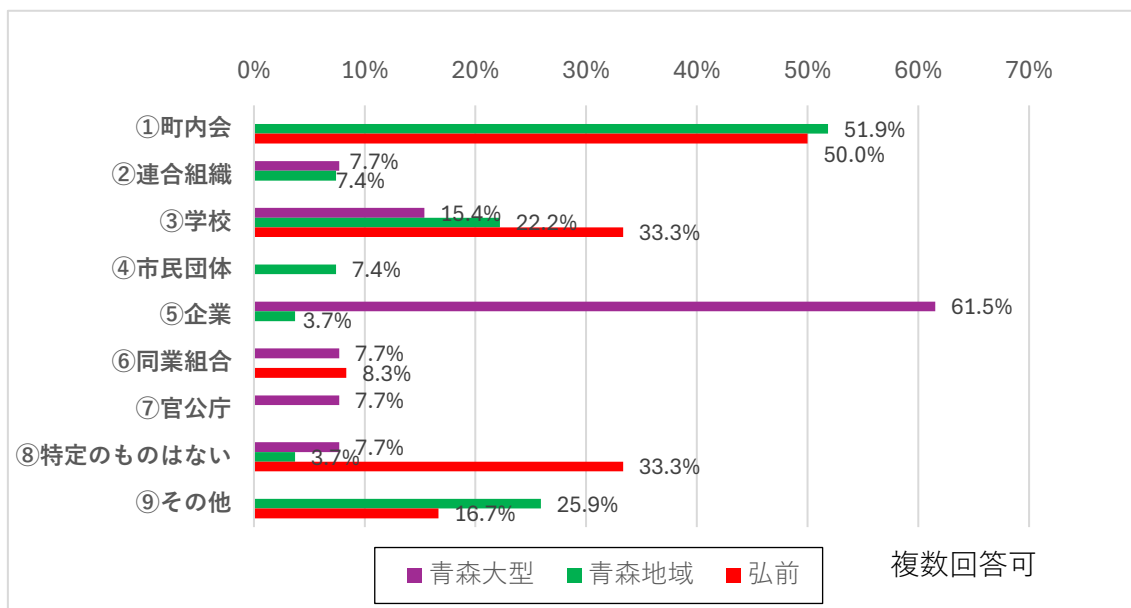


図 2-2 運行団体の組織母体

(3) 会員に占める組織母体の関係者の割合

青森市の大型ねぶたと弘前市の団体は、半数以上の団体が自身の組織母体を中心に構成されているが、青森市の地域ねぶたは、8割以上の団体が外部から人員を受け入れている（図 2-3）。具体的な内訳を見ると、地域ねぶたは、近隣町会からの参加が多い傾向にある。また、弘前市は「友人知人」と回答するケースが最も多かった。また、佐々木（2024）によると、2023 年の地域ねぶたの参加者のうち地域外の方は約 19%となっている。

1984 年の調査と比較すると、青森市の地域ねぶたにおいて大きな変化が生じており、多くの団体が人数にかかわらず、外部と接点を持つようになったことが分かる（図 2-4）。

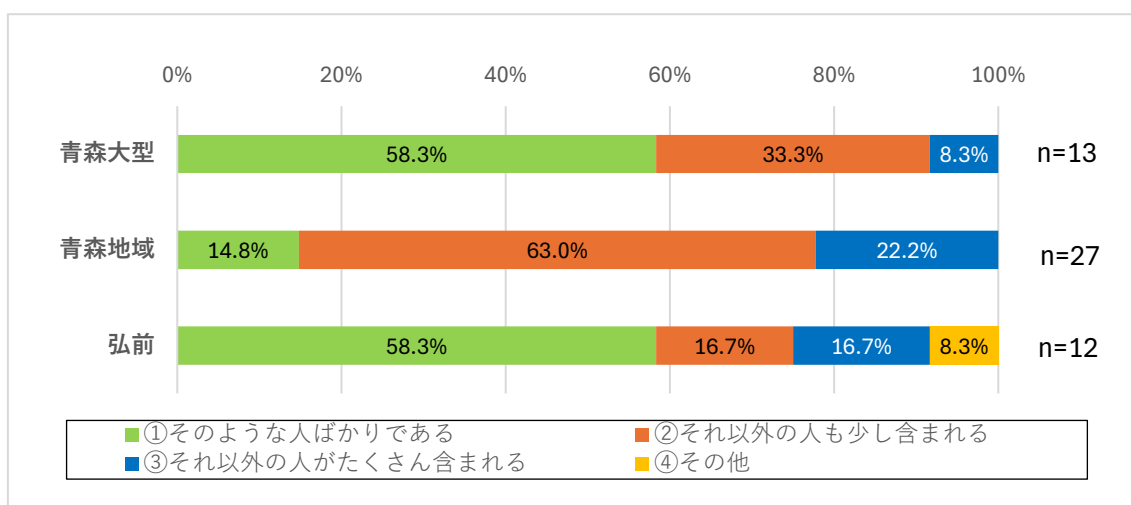


図 2-3 会員に占める組織母体の関係者の割合

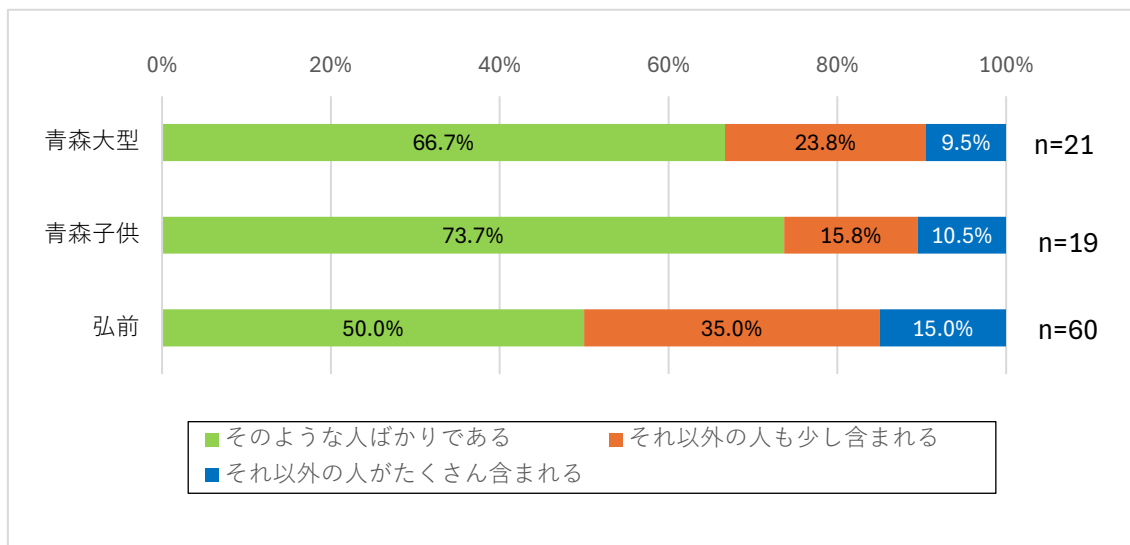


図 2-4 会員に占める組織母体の関係者の割合（田中〔1986〕をもとに筆者作成）

（4）囃子手の動員方法

青森市の大型ねぶたでは、1984 年と比較し謝礼を出して頼む割合が減少し、自前での演奏が増加した。その一方で、地域ねぶたでは、1984 年と比較すると自前で演奏する割合が大幅に減少している。弘前市は、自前での演奏が主流であることは変わらないが、「謝礼を出して頼む」団体がいなかった（図 2-5, 図 2-6）。

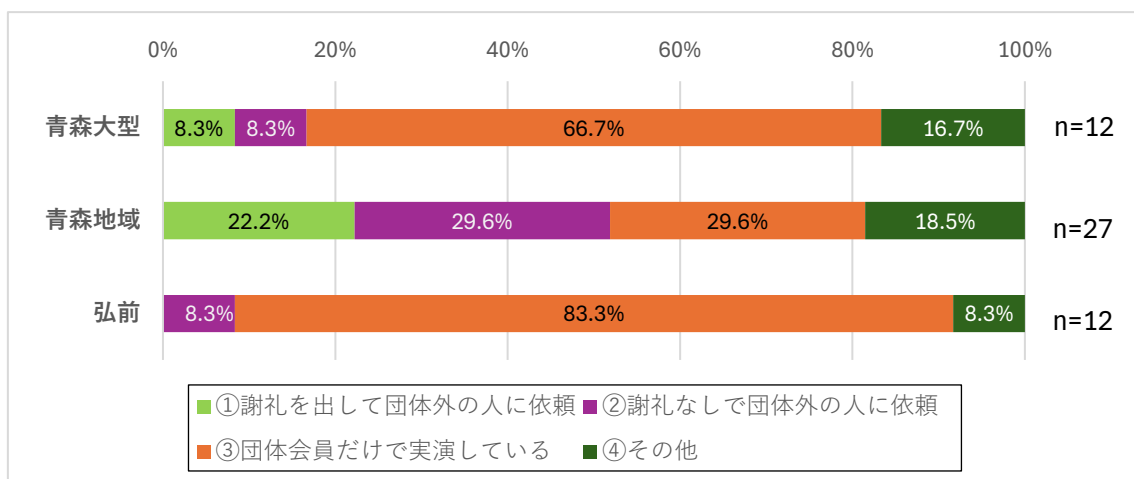


図 2-5 囃子手の動員方法

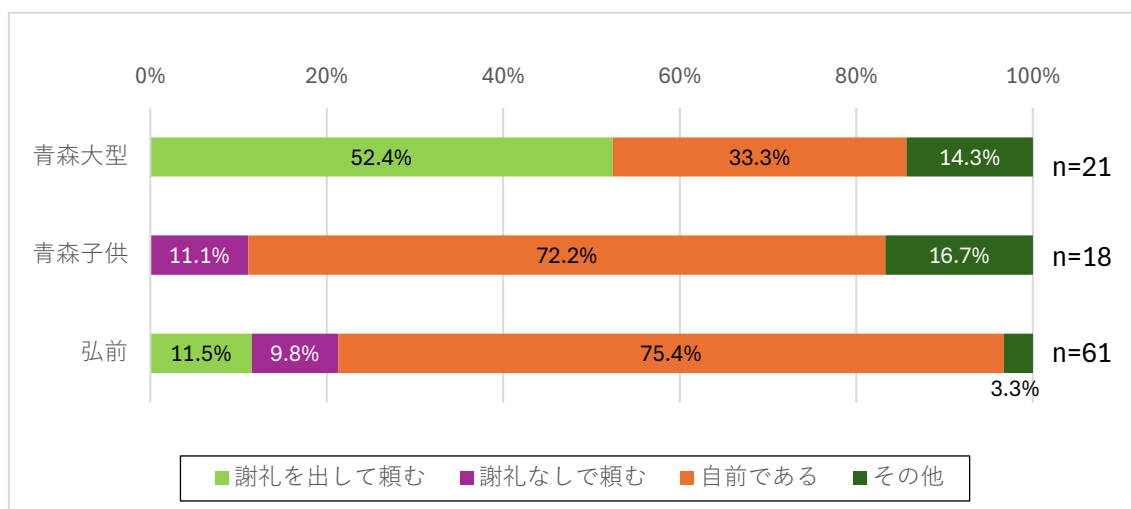


図 2-6 囃子手の動員方法（田中 [1986] をもとに筆者作成）

(5) 本体の制作・調達方法

青森市の大型ねぶたは、回答したすべての団体で専門家・業者の手が加わっている。実際、青森市の合同運行は、「ねぶた師」と呼ばれる制作者の作品発表の場となっており、大方の団体は、ねぶた師を中心とする専門チームに制作を依頼している。その一方で、弘前市は「前年度使用したものを再利用する」の回答が各項目の中で最も多かったが、実際は多くの団体が扇ねぶたを運行し、ねぶた絵を毎年張り替えるため、おそらく扇形の骨組みを再利用するという意味で回答したと考えられる。そして、全体の 25% の団体で自主制作していることが明らかになった（図 2-7）。三浦（2016）によれば、弘前市の団体は制作に関する専門家への依存度が比較的低く、1984 年と 2009 年の調査結果を比較しても、その傾向は変化していない（図 2-8）。

青森市の地域ねぶたについては、2023 年の調査において、「次年度も同じ作品を再利用する」と回答した地域が最も多く、全体の約 42% を占め、次いで「自主制作」が約 27%、「プロに依頼する」が約 23% となっている。また、この他には「買う」「借りる」といった回答も見られた。再利用の割合が最も大きい状況から、経費をできる限り抑えようとする団体の意図が読み取れる（図 2-9）。

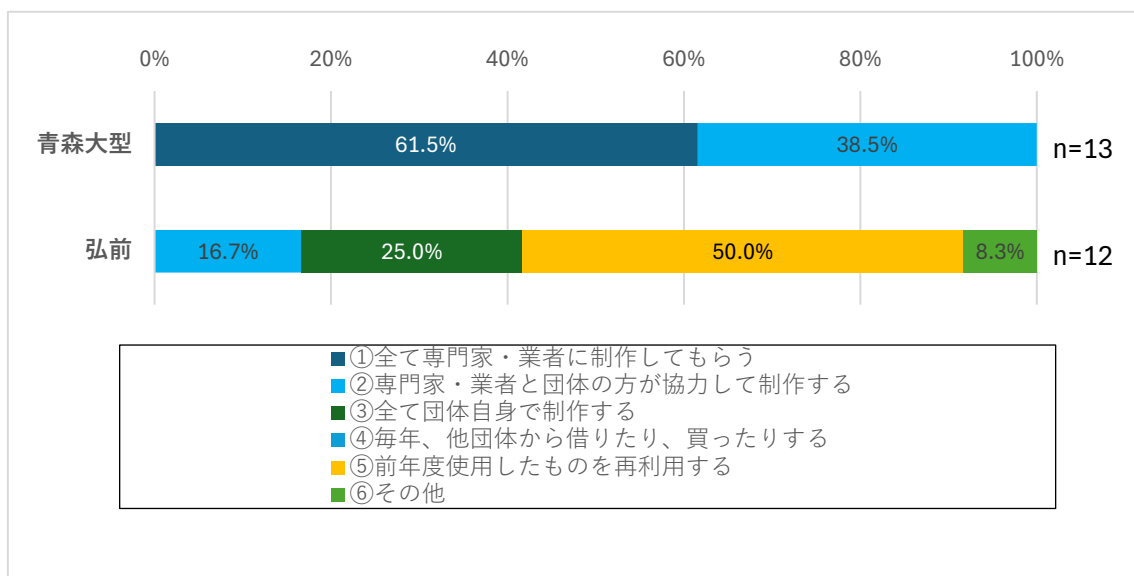


図 2-7 本体の制作、調達方法

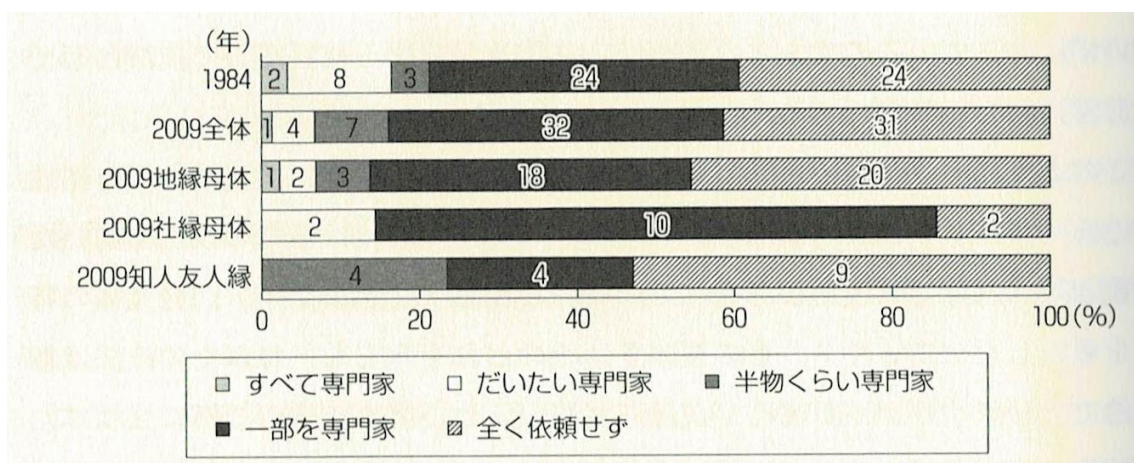


図 2-8 弘前市の団体における制作方法（三浦 [2016] から抜粋）

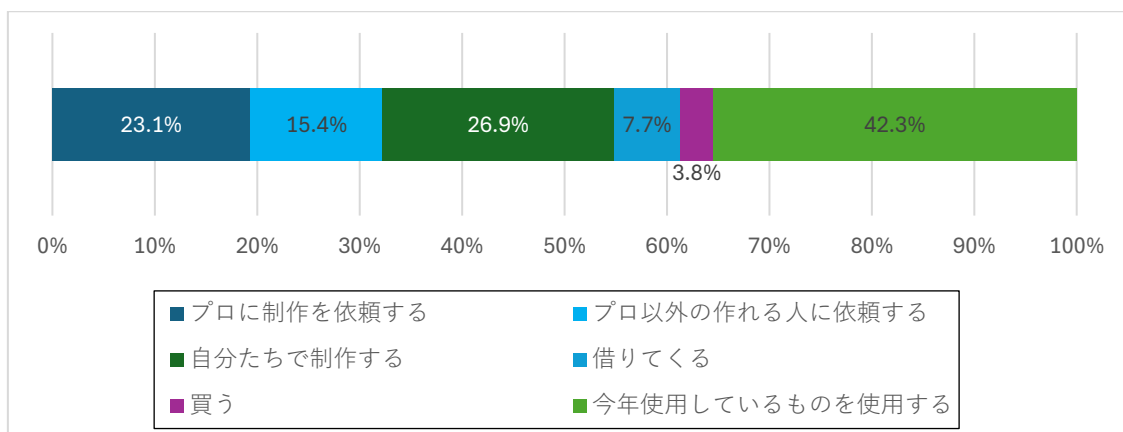


図 2-9 地域ねぶたにおける本体の制作、調達方法（佐々木 [2024] をもとに筆者作成）

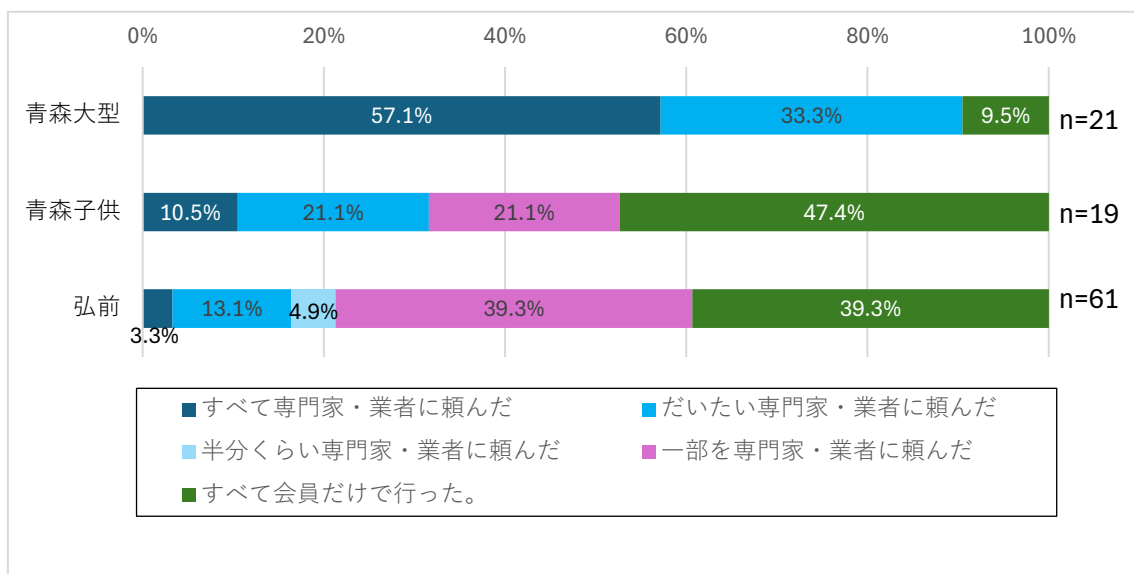


図 2-10 本体の制作、調達方法（田中 [1986] をもとに筆者作成）

(6) 囃子練習の開始時期

囃子の練習は、各団体の会員が祭りに向けて互いに交流を深める重要な機会である。今回のアンケート調査では、囃子練習の開始時期について質問を設定し、結果は以下のようになった（図 2-11）。

青森市の大型ねぶたでは、8 割以上の団体が年間を通して練習していることが分かった。これは、各囃子団体の技術向上はもちろん、祭りにかかわらず各種イベントにおいて囃子を実演する機会があることも背景として考えられる。地域ねぶたでは、開始時期は分散しており、各団体によって状況は様々である。「その他」の回答には、先述したように外部に囃子手を依頼していることや、CD を使用しているケースが挙げられた。これとは対照的に、弘前市の場合は約 7 割の団体が 7 月に集中している。

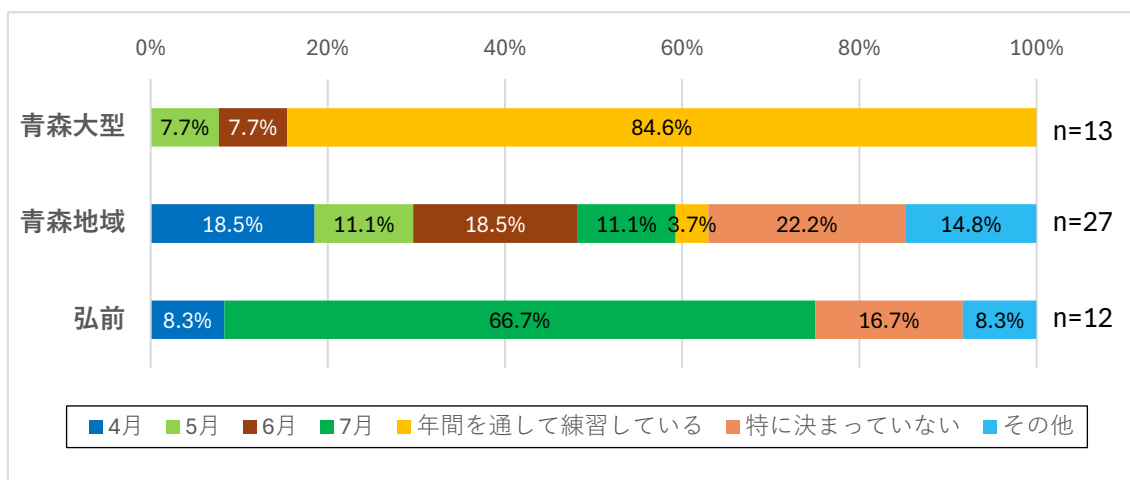


図 2-11 囃子練習の開始時期

(7) 仮設小屋の設置時期

ねぶた・ねぶた祭りに参加する団体は、主に本体の制作、保管を目的として小屋を設置することが一般的であり、団体の拠点となる場所である。青森市の大型ねぶたの場合は、毎年4～5月に仮設小屋が一斉に設置され、団体間で大きな差異はみられない。そのため、ここでは地域ねぶたと弘前市の団体を比較することとする（図 2-12 参照）。

地域ねぶたは、「小屋を用意していない」の回答が最も多く約 26% となった。これは、ねぶたの制作を団体外に依頼することで制作、保管する必要があるからだと思われる。弘前市は、設置時期が 6 月に集中している。それ以前の時期の回答がないのは、扇ねぶたはねぶた絵を貼るまでは小屋を必要としないためだと考えられる。また、先述した囃子の練習時期の傾向を踏まえると、弘前市は各団体が設置した仮設小屋を用いて囃子の練習をしていると予想される。

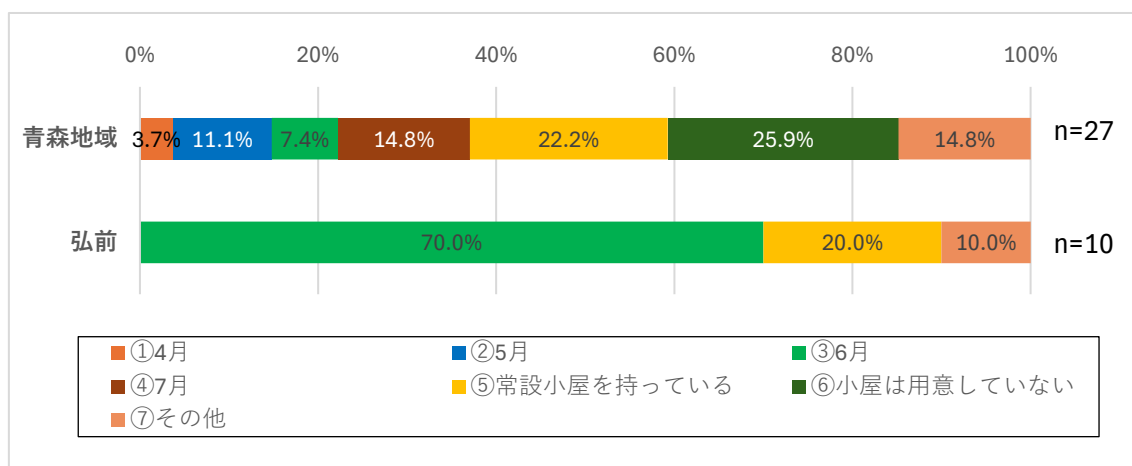


図 2-12 仮設小屋の設置時期

(8) 運行形態

青森市の大型ねぶたは、合同運行のみに参加するため、今回の比較対象から除外した。弘前市は、合同運行に参加する団体を対象に調査を行ったが、そのうち 75% は独自で単独運行をしていることが分かった。地域ねぶたは、各地域での単独運行を主体としているため、合同運行に参加する割合は 4 割弱にとどまった。マスメディアでは、一般的に合同運行のみが取り上げられることが多いが、実際は両地域とも団体独自の運行が並行して行われていることが読み取れる。

単独運行の日程については、地域ねぶたの場合、回答した 22 団体にうち 18 団体が 7 月中旬から下旬にかけて 1～3 日間の日程で行われており、弘前市の場合は、合同運行の前後に行われている傾向がある。

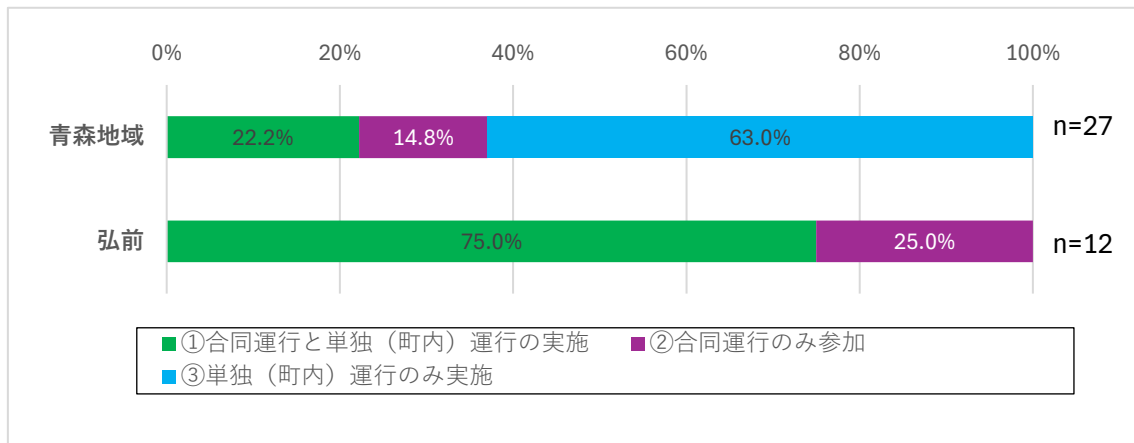


図 2-13 合同運行と単独運行の実施状況

(9) 費用

青森市の大型ねぶたと弘前市の団体を対象に 1 年間の収入額と支出額を尋ねた。当初は内訳を把握する予定だったが、両地域とも回答率が低かったため、総額だけに注目する。また、青森市の地域ねぶたについては、2023 年の調査結果を参考にみていく。

まず収入総額は、弘前市の場合、最小額が 80 万円、最高額が 312 万円で中央値は 160 万円だった。青森市の大型ねぶたは、最小額が 1000 万、最高額が 2500 万で中央値は 1700 万円となった。

支出総額は、弘前市の場合、最小額が 70 万円、最高額が 216 万円で中央値は 120 万円だった。青森市の大型ねぶたは、最小額が 1500 万円、最高額が 3000 万円で、中央値は 1700 万円となった。また、地域ねぶたは、平均額が 45.3 万円で最高額が 130 万円となっている。内訳では制作費が最も高く全体の 32%を占めている。

ただし、先述したように回答数の関係上、今回の調査結果の精度は限定的だと考えられる。

(10) 祭り当日の参加人数

青森市の大型ねぶたと弘前市の団体を対象に祭り当日の参加人数を尋ねた結果、以下のようになった（図 2-14,図 2-15）。青森市の大型ねぶたは、ハネトを除いた人数を対象としている。青森市の地域ねぶたについては、2023 年の調査を参考とする。参加者の人数規模は、青森大型、弘前ともに 100～199 人規模の団体が最も多い。また、1984 年の調査と比較すると、小規模の団体が増加し大規模の団体が減少していることが読み取れる。青森市の地域ねぶたは、2023 年の調査によると 1 日あたりの参加者の平均は 134 人で、ハネトを除いた人数は 53 人となっている。

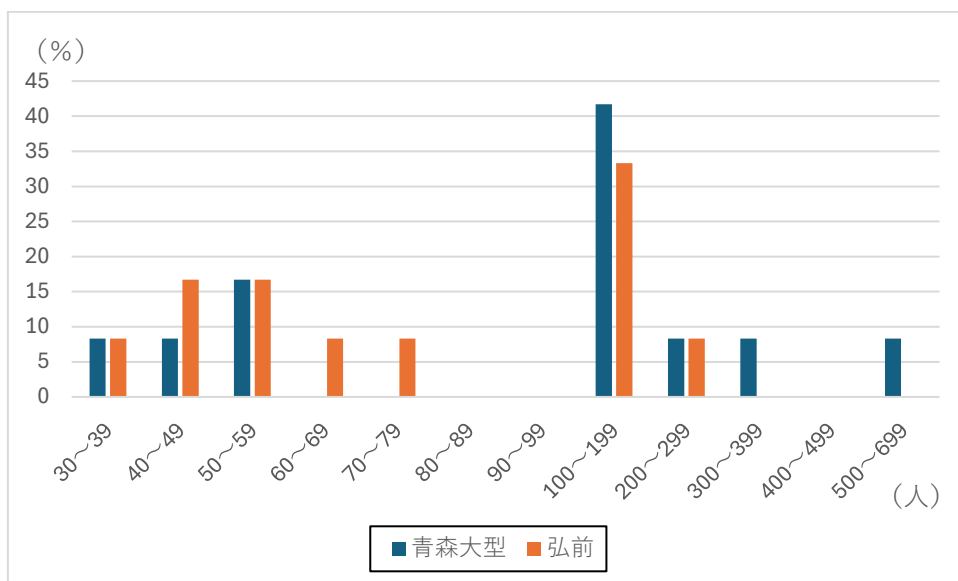


図 2-14 祭り 1 日あたりの参加人数

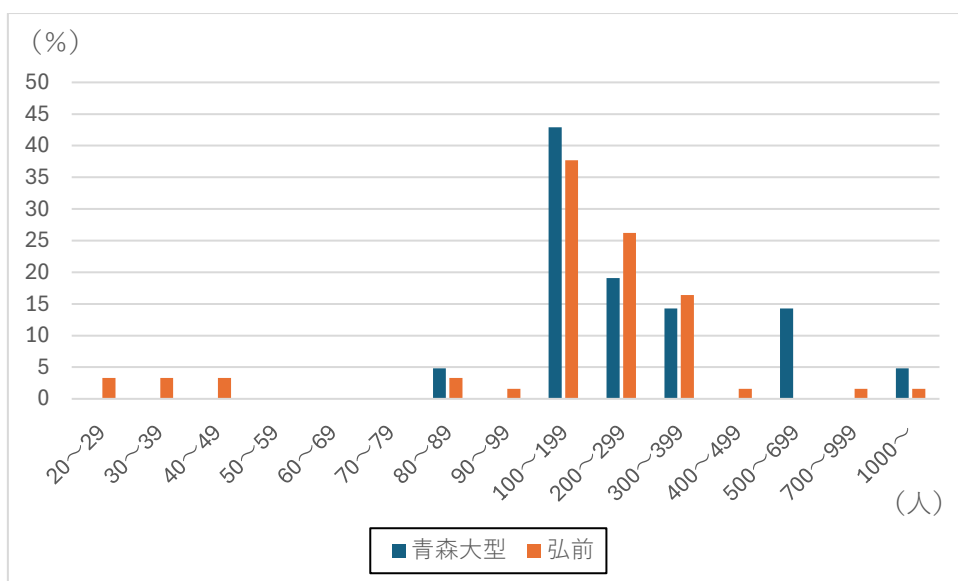


図 2-15 祭り 1 日あたりの参加人数 (田中 [1986] をもとに筆者作成)

第3節 意識調査の結果

(1) 団体が運行する目的

ここでは、青森市の大型ねぶたと弘前市の団体を対象に行った運行の目的に関する質問と、2023年の調査における地域ねぶた存続の意義に関する質問の回答内容を比較しながら分析を行う（図2-16、2-17、2-18、2-19）。

青森市の大型ねぶたでは、「伝統の継承」の割合が最も高く、他の2地域と比較しても高い傾向にある。一方、弘前は「祭りを楽しむ」の割合が最も高い。2009年の調査でも団体形態にかかわらず同様の傾向が見られており、参加者主体の祭りを意識していることが推測できる。また、「子供の健全育成」も7割を超えているが、これは、地域ねぶたと傾向が似ている。1984年の調査と比較すると、青森市の地域ねぶたでは子供や青少年に対する意識の強さが変わらないことが読み取れる。また、大型ねぶたでは「伝統の継承」、弘前市では「祭りを楽しむ」が大きく割合を伸ばしていることが分かる。

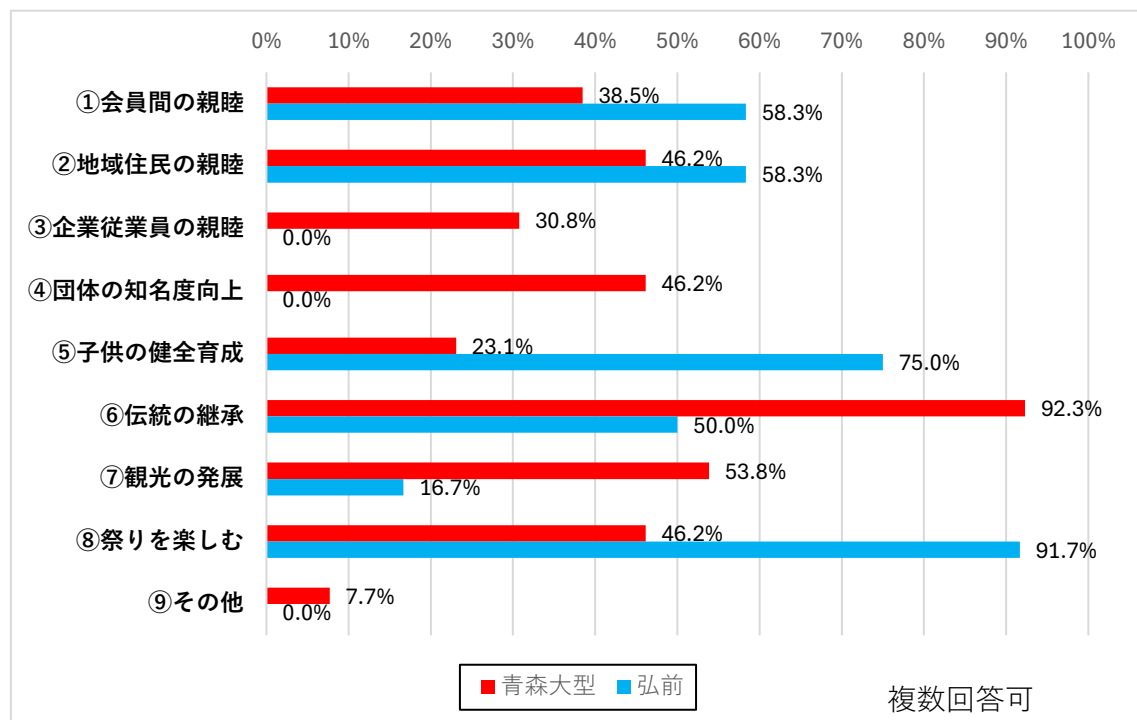


図 2-16 運行の目的

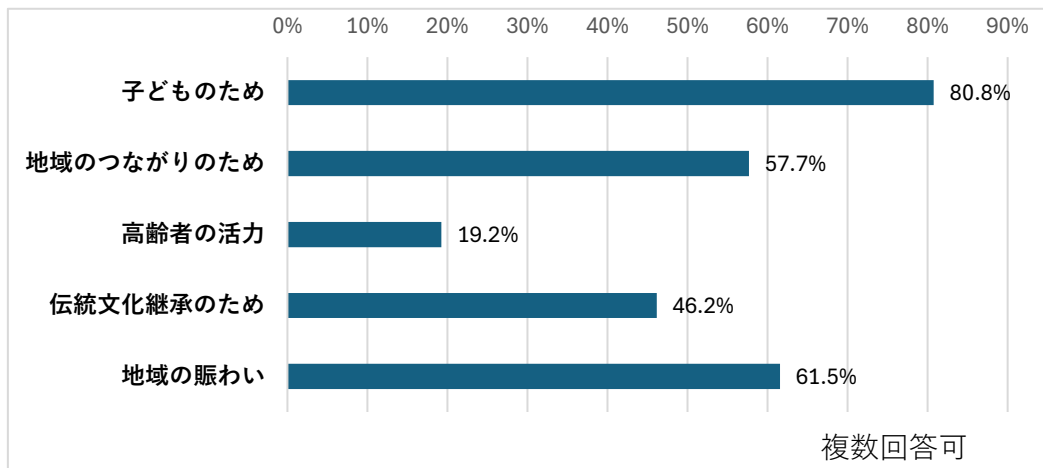


図 2-17 地域ねぶた存続の意義（佐々木 [2024] をもとに筆者作成）

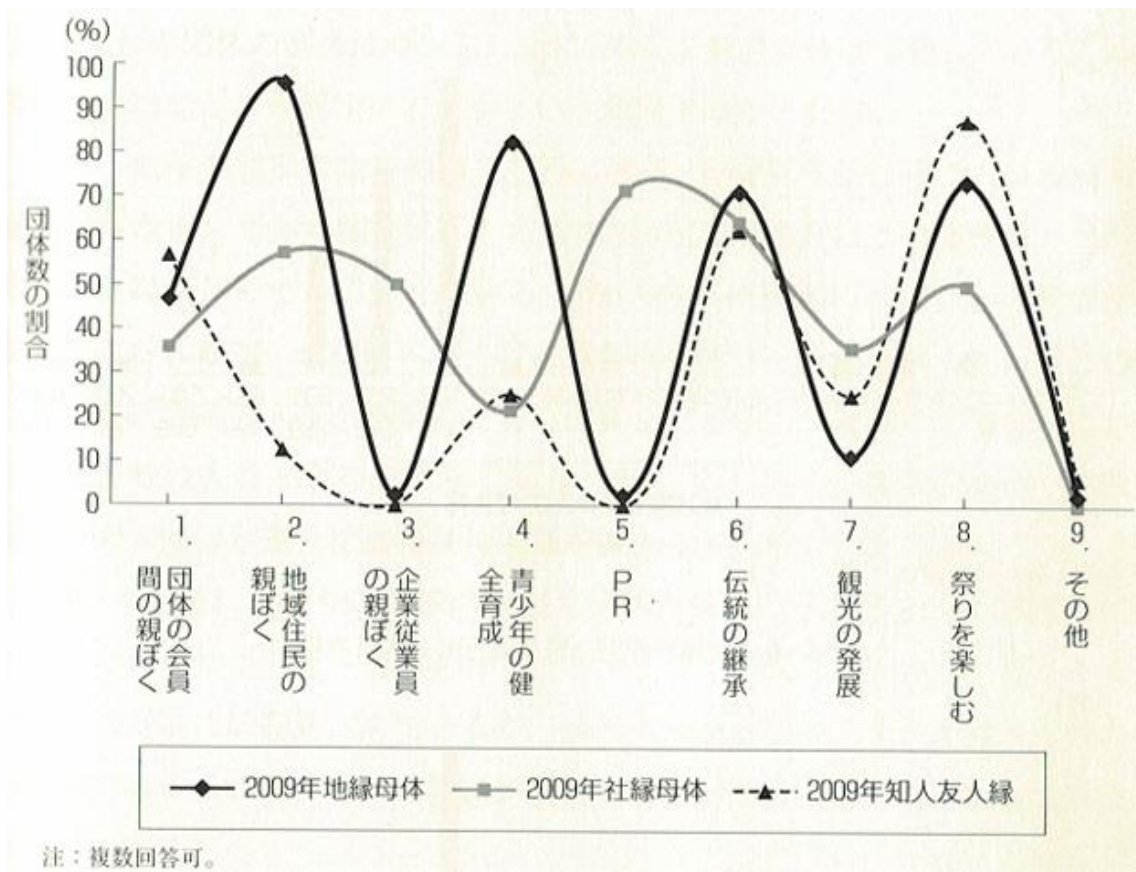


図 2-18 弘前市の運行団体における運行の目的（三浦[2016]から抜粋）

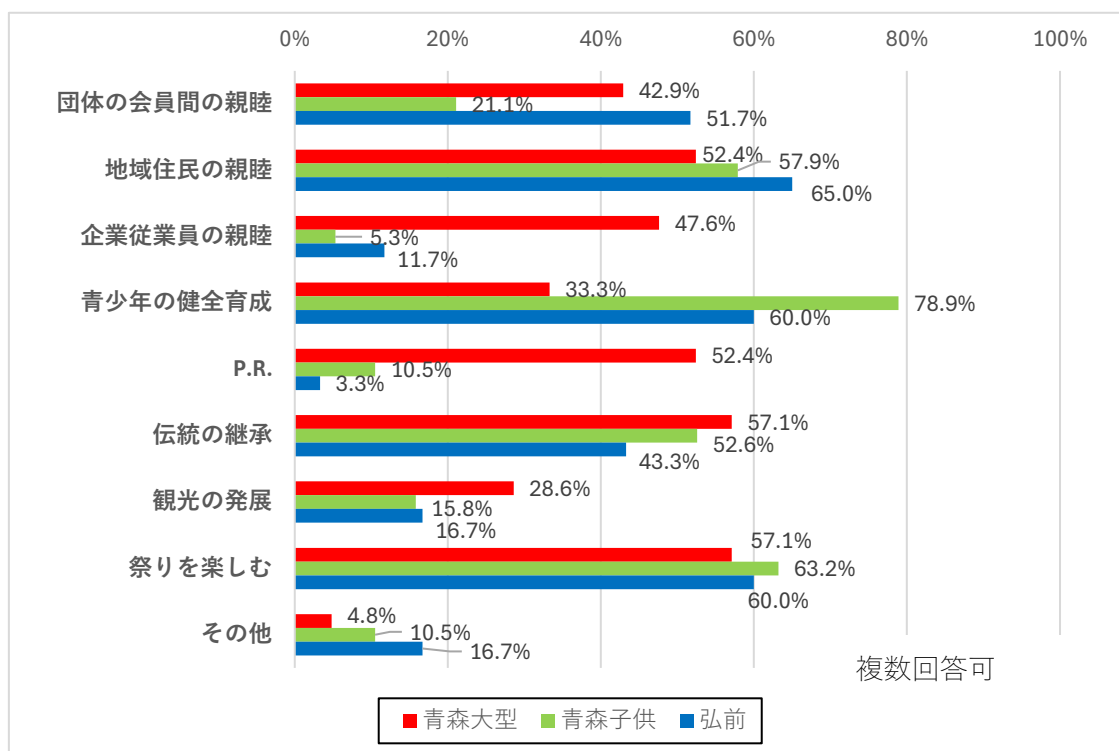


図 2-19 ねぶたを出す目的（田中 [1986] をもとに筆者作成）

（2）団体が求める祭りのあり方

田中重好は、1984 年の質問票調査で①市民に身近な祭りー観光の祭り、②伝統の尊重ー現代的感覚の導入、③手づくりの祭りー専門家を活用する祭り、という対立する考えを用意し、運行団体へ意見を求めた。今回は、以上の 3 つの視点に加え、人材や情報に関する県内外の交流をテーマに意識調査を行った。2 つの調査結果を比較し、分析を行うこととする。

①「する祭り」と「見せる祭り」に対する意識

「市民に身近な祭りであるべきだ」という意見には、賛成が圧倒的に多く、地域間でも差は見られない。また、1984 年の調査においても同様の傾向が見られ、約 40 年が経過しても各団体の意識に大きな変化は生じていない（図 2-20、2-21）。

その一方で、「観客を楽しませる祭りでなければならない」という意見に関しては、全体的に賛成が多かったが、青森市の大型ねぶたが 84.6%、青森市の地域ねぶたが 70.4%、弘前市が 58.3%と地域間に差がみられた。また、青森市の大型ねぶたでは、3 地域で唯一反対意見が出ている（図 2-22）。1984 年の調査では、「県外の人を楽しませる祭りでなければならない」という意見に対し、3 地域とも「どちらとも言えない」の割合が最も多く、賛成と反対の間に大きな差が生じなかった（図 2-23 参照）。「観客」と「県外の人」は必ずしも一致するわけではないが、以上の 2 つの調査から「見せる祭り」に対する考え方が寛容になりつつあることが読み取れる。

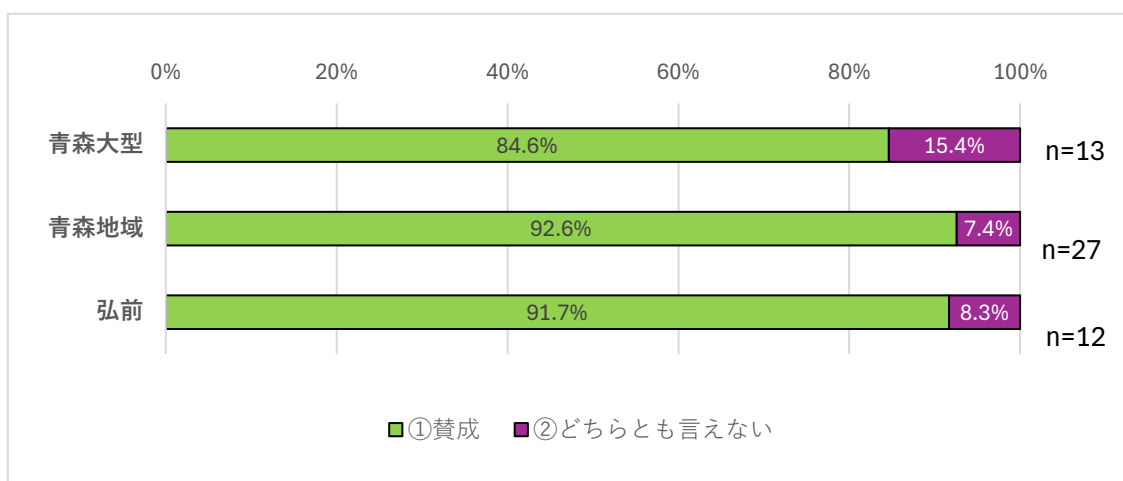


図 2-20 市民に身近な祭りを推進することへの賛否

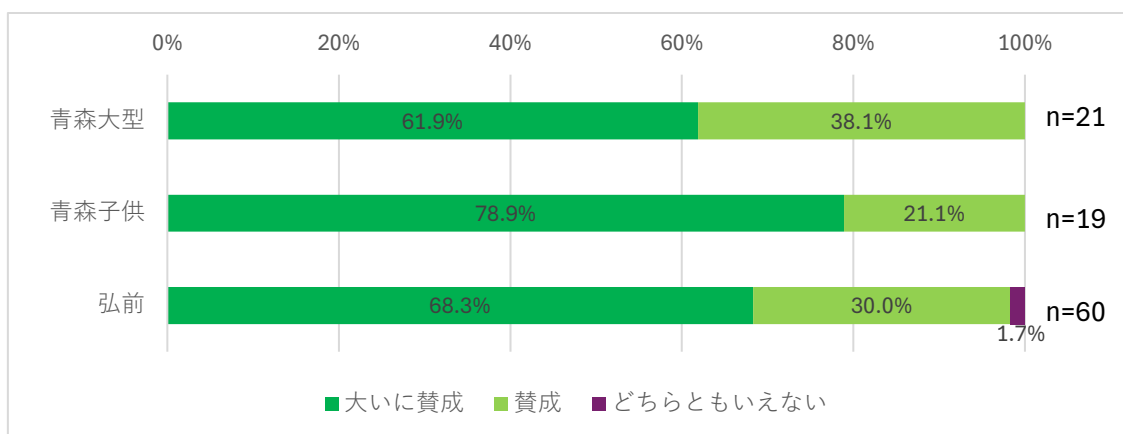


図 2-21 市民に身近な祭りを推進することへの賛否（田中 [1986] をもとに筆者作成）

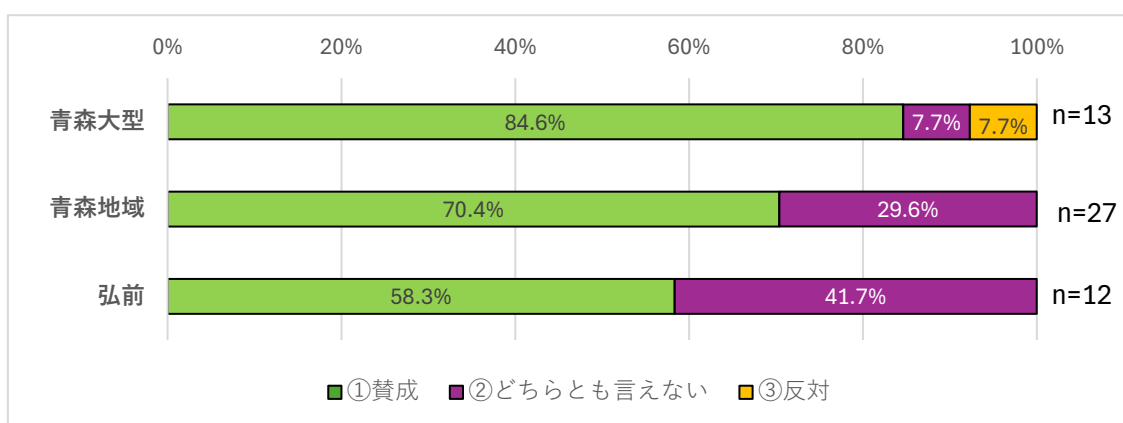


図 2-22 観客を楽しませることへの賛否

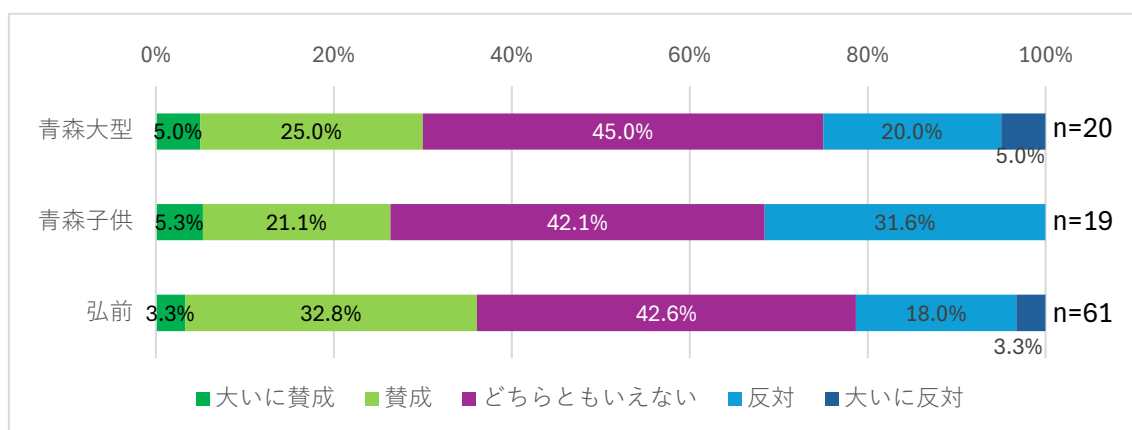


図 2-23 県外の人を楽しませることへの賛否（田中 [1986] をもとに筆者作成）

②伝統と革新

1984 年の調査では、「何よりも伝統を大切にすべきだ」という意見に対し、3 地域とも 8 割以上の団体が賛成だったのに対し、「時代とともに変わってゆくべきだ」という意見への賛成は 3 割程度だった（図 2-25、2-27）。しかし、今回の調査では以前の傾向が逆転し、伝統の保持よりも時代に合わせた変化の方が支持されている（図 2-24、2-26）。特に青森市の地域ねぶたは、1984 年時点で時代に合わせた変化に対し他の 2 地域よりも多く反対意見が出たが、今回の調査では、むしろ伝統の保持に対し、3 地域で唯一反対意見が出た。

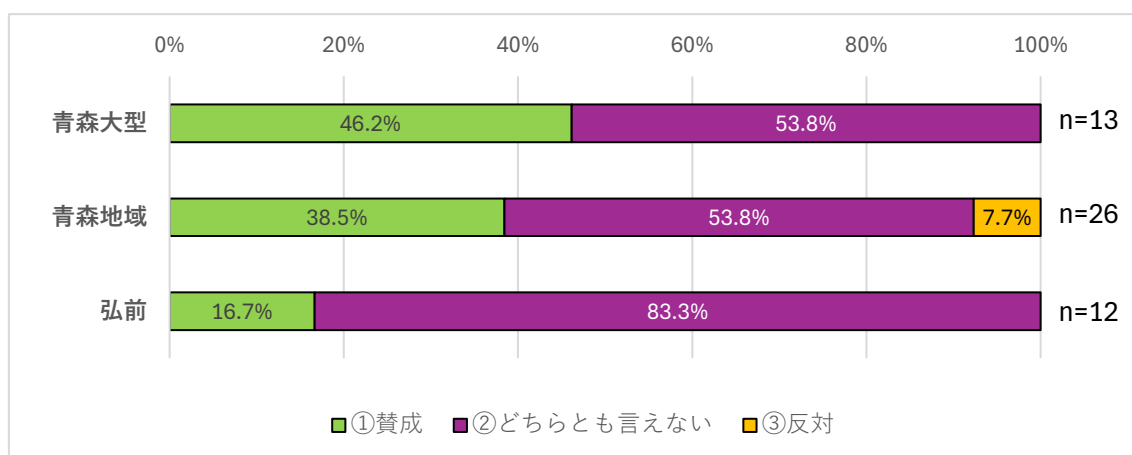


図 2-24 伝統を大切にすることへの賛否

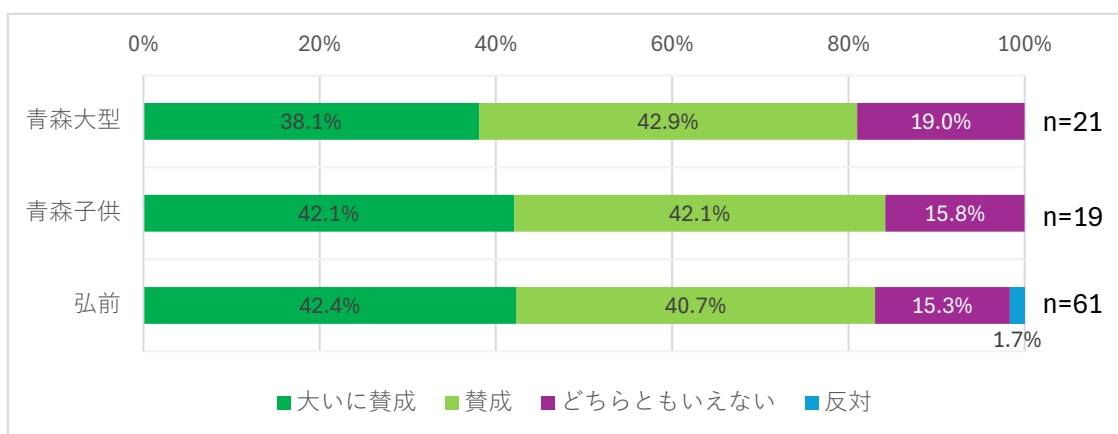


図 2-25 伝統を大切にすることへの賛否（1984 年調査より）

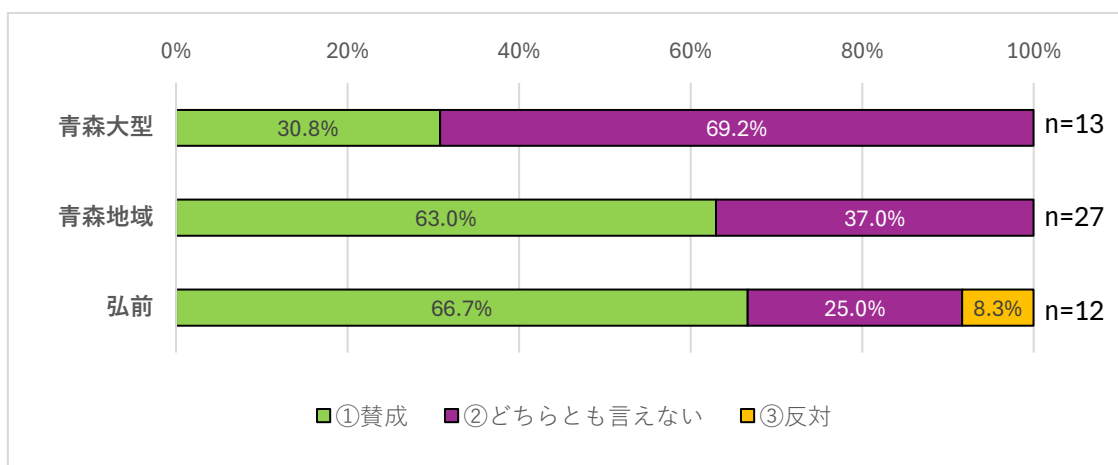


図 2-26 時代とともに変化することへの賛否

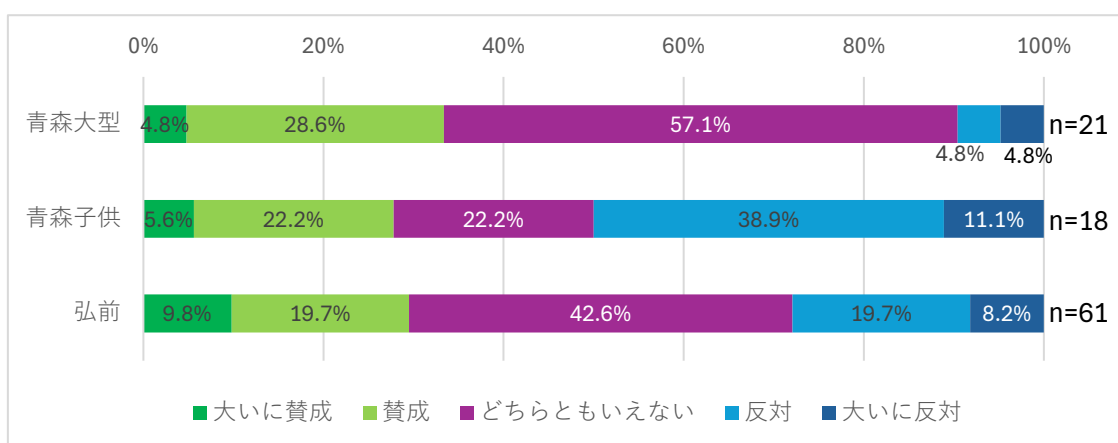


図 2-27 時代とともに変化することへの賛否（田中 [1984] をもとに筆者作成）

③制作をめぐる意識

自主制作したねぶた・ねぶたを運行することに対しては、賛成の割合が大きい順に青森市の大型ねぶた、地域ねぶた、弘前市となっており、地域間で差がある。その一方で、「どちらとも言えない」がどの地域も大半を占めている（図 2-28）。1984 年の調査では、現在より賛成意見が 2～3 割ほど多かったが、地域間の差の特徴は大きく変わっていない（図 2-29）。

専門家に依頼して制作することに対しては、自主制作に対する意見と同様に「どちらとも言えない」の割合が大きい傾向にある。また、地域間の差に注目すると、青森市の大型ねぶたが他の 2 地域と比べ賛成の割合が大きい（図 2-30）。これは先述した通り、ほとんどの大型ねぶたが専門家に依頼して制作されていることが背景にあると考えられる。また、1984 年の調査と比較すると青森市の地域ねぶたと弘前市では、反対の割合が約 3～4 割減少している（図 2-31）。

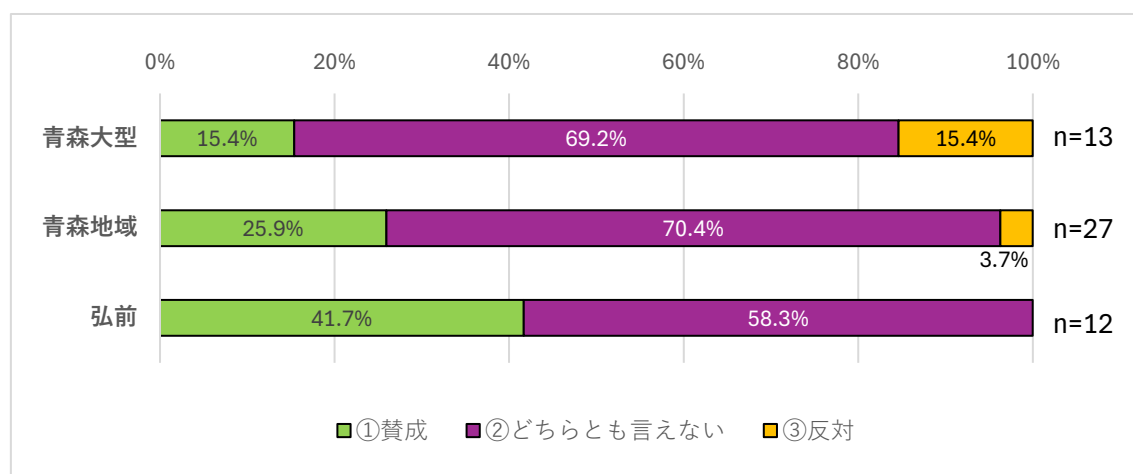


図 2-28 自主制作したねぶた・ねぶたを運行することへの賛否

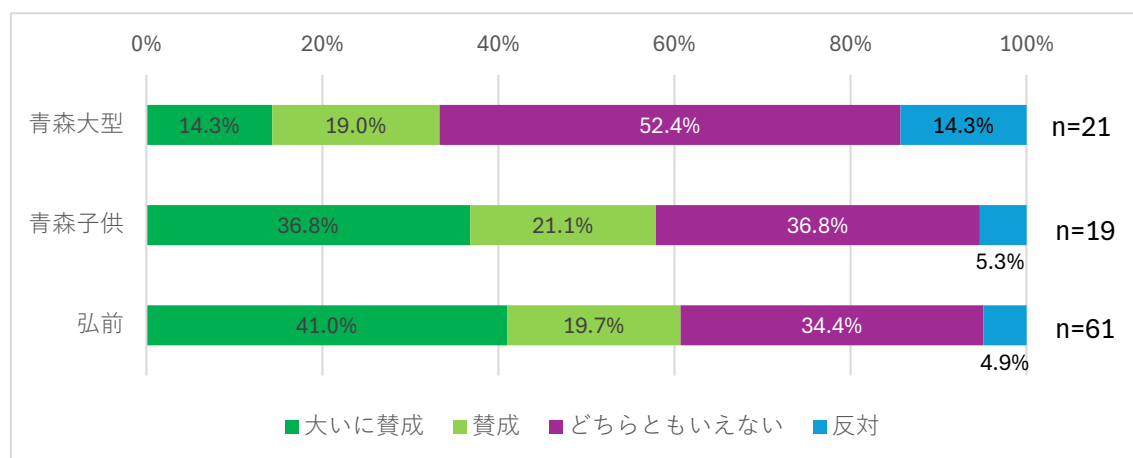


図 2-29 自主制作したねぶた・ねぶたを運行することへの賛否（田中 [1986] をもとに筆者作成）

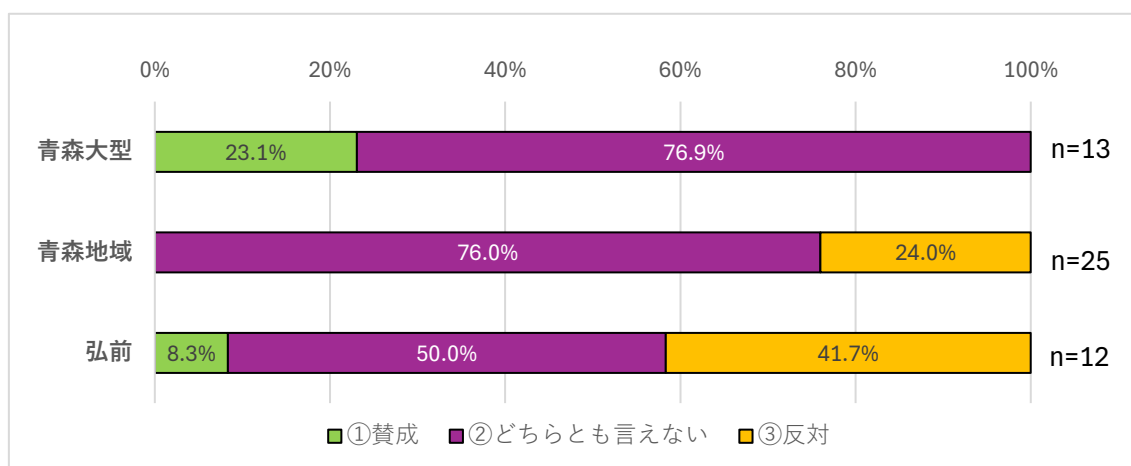


図 2-30 専門家に依頼して制作することへの賛否

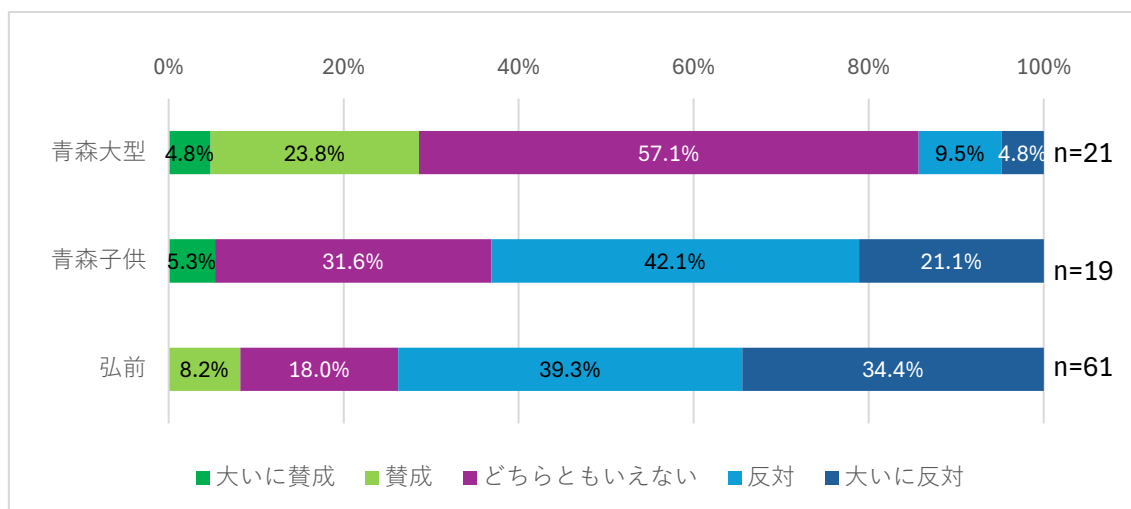


図 2-31 専門家に依頼して制作することへの賛否（田中 [1986] をもとに筆者作成）

④県内外との交流

先述した実態調査の結果からも読み取れるように、団体の活動は団体内の構成員のみでは決して成立せず、常に団体や地域の枠組みを越えて連携する必要がある。こうした状況を踏まえ、今回の調査では以下の2つの内容を尋ねた。

まず、県外や海外からの人材の受け入れに関しては、3地域とも賛成が過半数を占めている。地域間の特徴に注目すると、大型ねぶたのみ「反対」がなく「どちらとも言えない」が半数近い割合を占めている。これに対し、地域ねぶたと弘前市は賛否の割合が似ており、「賛成」が7割程度で優位となっている。（図2-32）。

その一方、県内のねぶた・ねぶた同士の交流については、地域ねぶたは賛成が優位であるものの、他の2地域は、「どちらとも言えない」と拮抗している状態にある（図2-33）。いずれにせよ、反対意見が極めて少ないことから、各団体は地域間の交流に対し比較的寛容で

あることが推測できる。

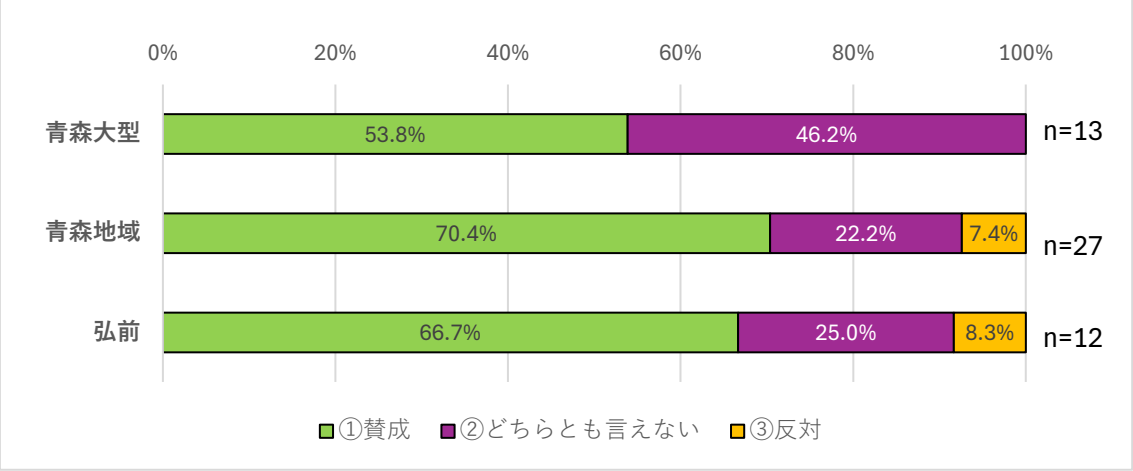


図 2-32 県外や海外からの人材の受け入れに対する賛否

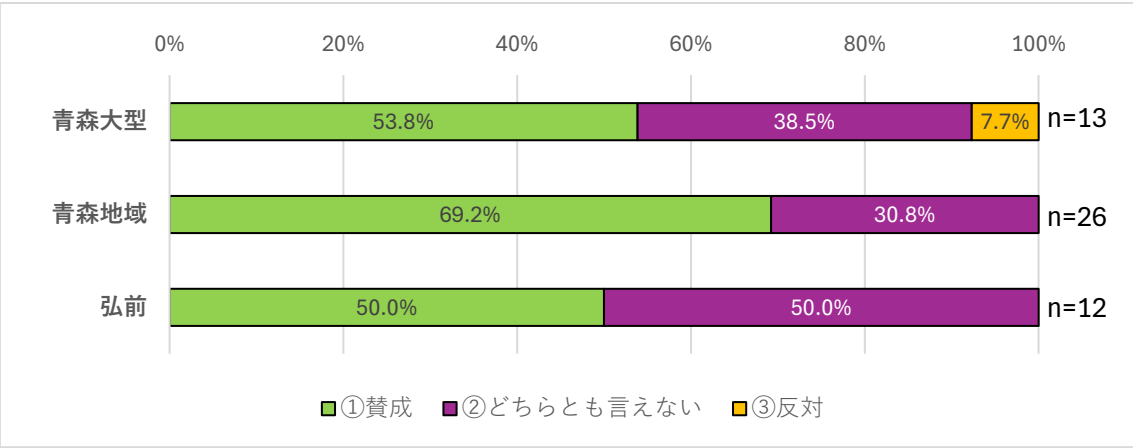


図 2-33 県内のねぶた・ねぶた同士が交流することへの賛否

第 4 節 現状の課題

今回の調査では、青森市の大型ねぶたと弘前市の団体を対象に（1）経費、（2）台車の引き手の確保、（3）囃子手の確保、（4）制作や準備に関わる人の確保、（5）若手の確保、という 5 つの視点から団体の抱える課題に注目した。

地域ねぶたに関する課題については、2023 年の調査結果を参考にする（図 2-34）。

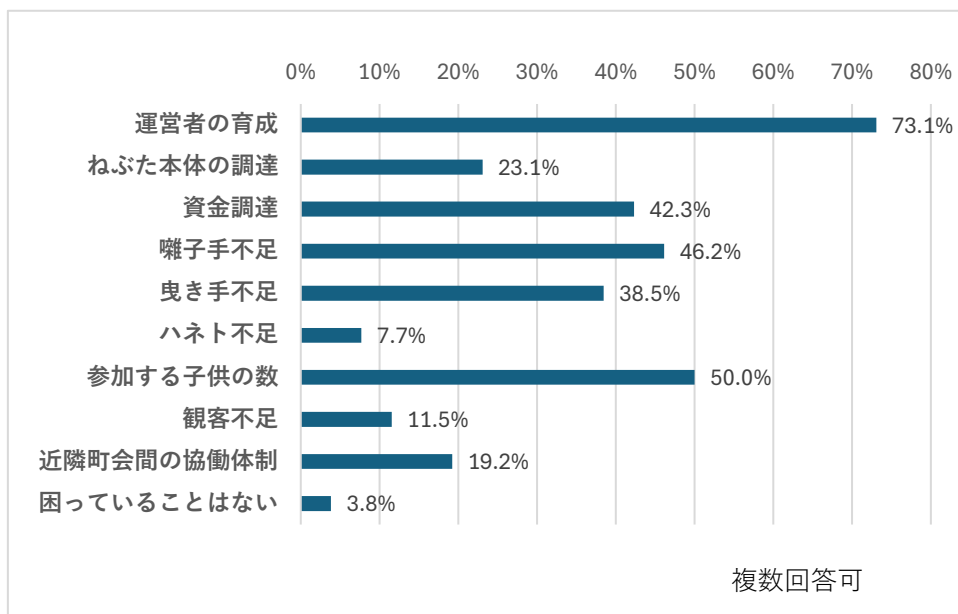


図 2-34 地域ねぶたの課題（佐々木 [2024] をもとに作成）

(1) 経費

弘前市は、「少し困る」、「困る」を合計した割合が9割を超えており、1984年と比較しても割合、深刻度ともに大きくなっている。その一方で、青森市の大型ねぶたは、「少し困る」「困る」を合計した割合が約7割で、1984年の「やや困る」「たいへん困る」を合計した割合と比較しても大きな差はない（図 2-35、2-36）。

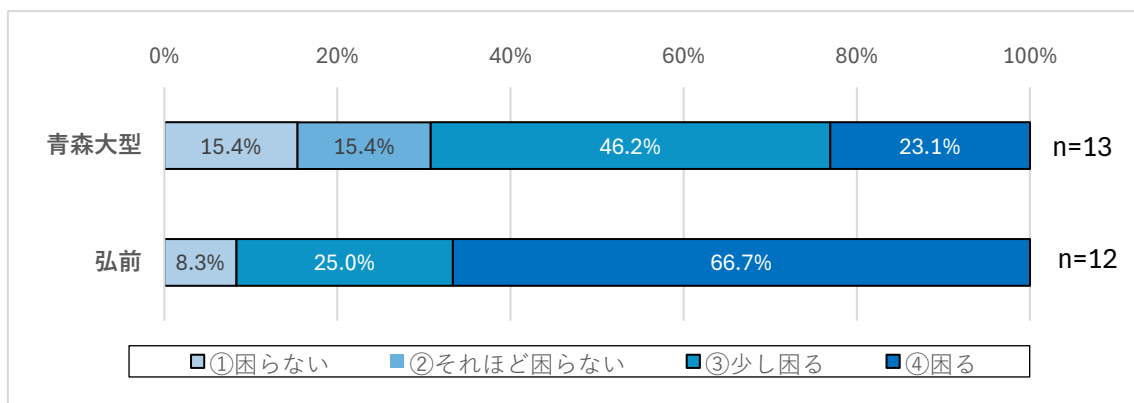


図 2-35 経費に対する意識

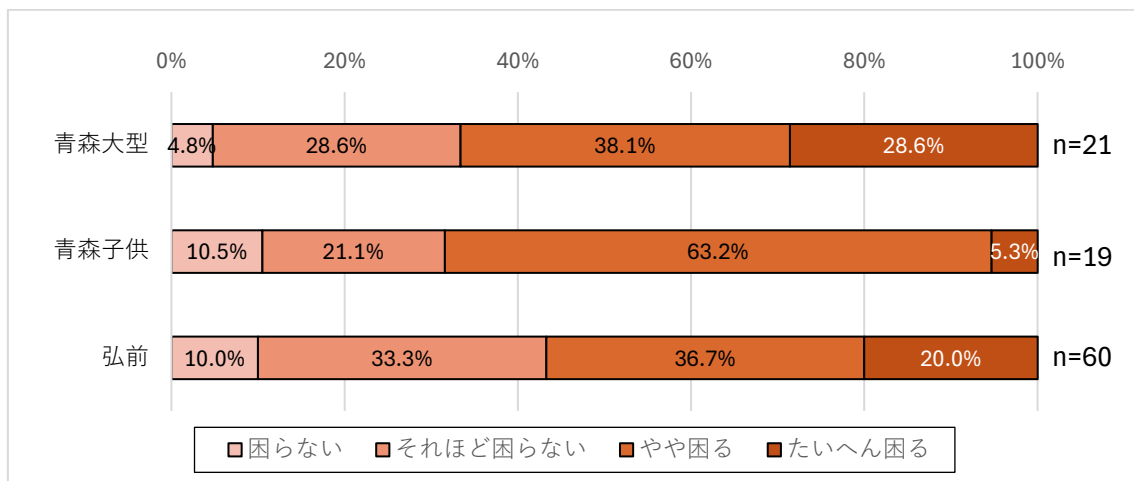


図 2-36 経費に対する意識（田中 [1986] をもとに筆者作成）

（2）台車の引き手の確保

青森市の大型ねぶたでは、困る、困らないの 2 つに分類した場合、両者は拮抗しているが、弘前市は全体の 25%が「少し困る」、50%が「困る」と回答しており、両地域には深刻度に差が見られる（図 2-37 参照）。

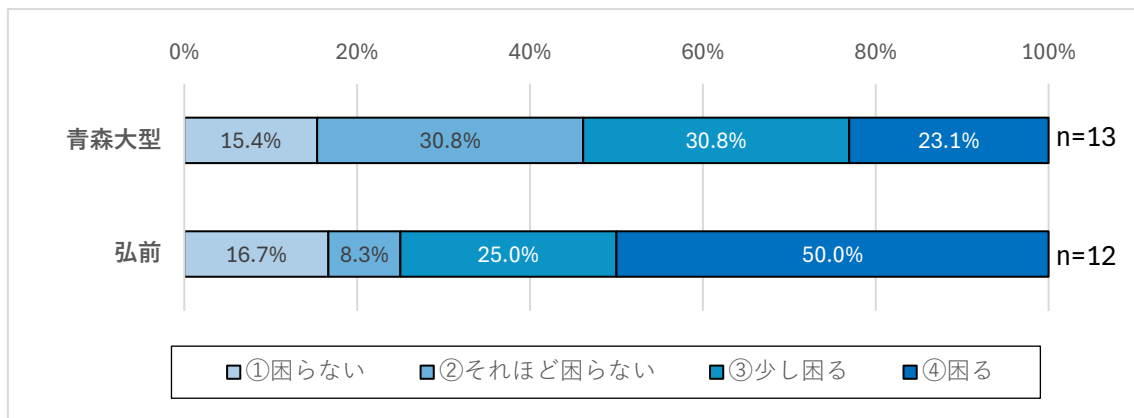


図 2-37 台車の引き手の確保に対する意識

（3）囃子手の確保

青森市の大型ねぶたは、囃子手の確保に比較的困らない団体が過半数を占めているが、弘前市は、全体の 3 分の 2 が「困る」と回答している。図 2-5 の結果から分かるように、弘前市は 8 割以上の団体が自前で囃子を演奏しており、団体内で人材を確保することに苦勞していることが読み取れる（図 2-38）。

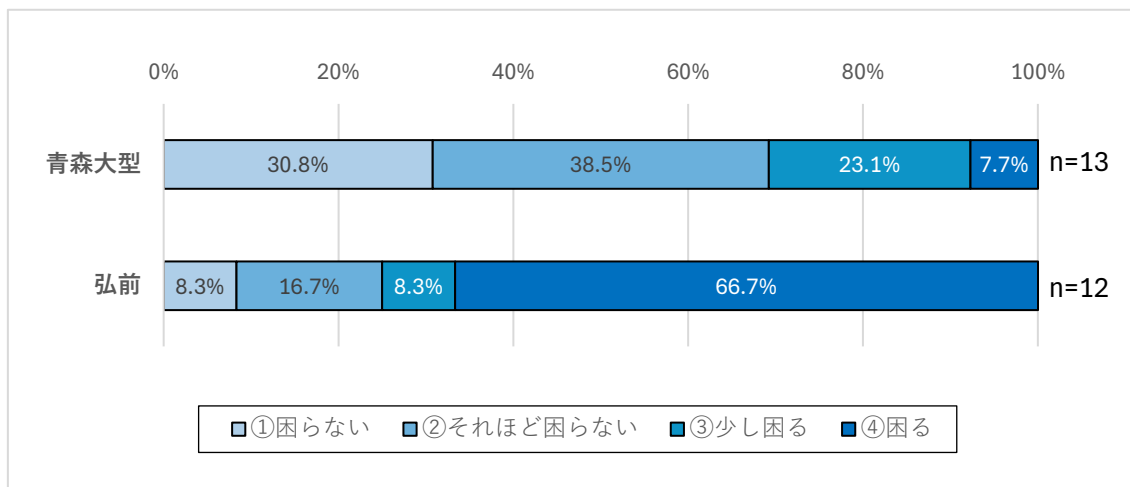


図 2-38 嚙子手の確保に対する意識

(4) 制作や準備に関わる人の確保

制作や準備に関わる人の確保は、両地域とも困っている割合は過半数を占めているが、弘前市は「少し困る」「困る」を合計した割合が8割を超え、より深刻な状況にあることが読み取れる（図 2-39）。

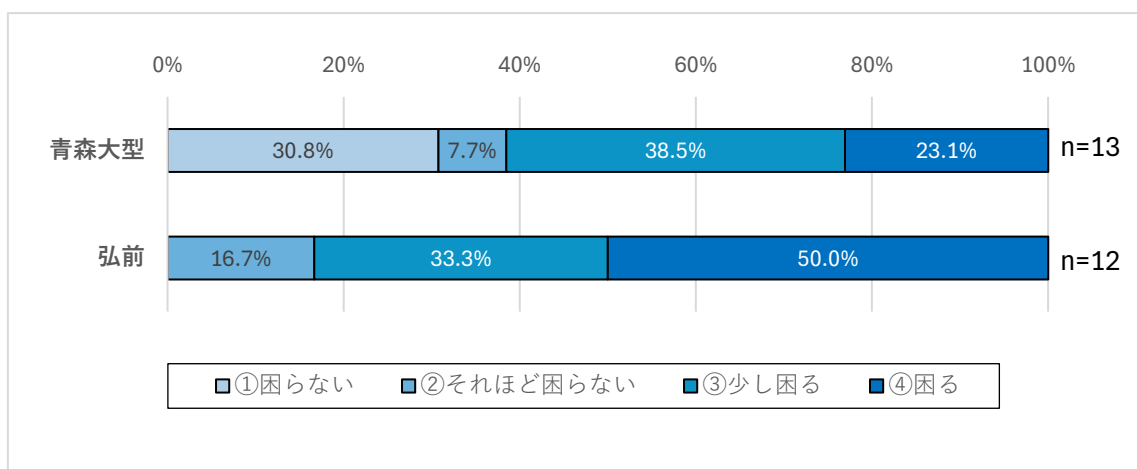


図 2-39 制作や準備に関わる人の確保に対する意識

(5) 若手の人材確保

青森市の大型ねぶたの場合、「少し困る」「困る」と回答した割合は77%で、以前の調査から17%増加している。また、弘前市の場合も8割以上で、以前より2割以上も増加している。また、両地域ともその程度は深刻化している（図 2-40, 2-41）。

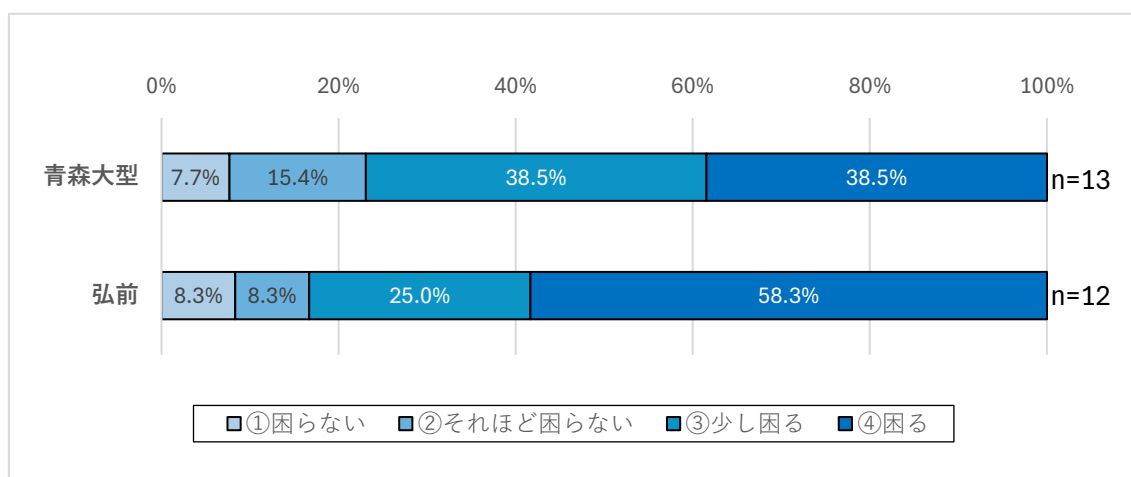


図 2-40 若手の確保に対する意識

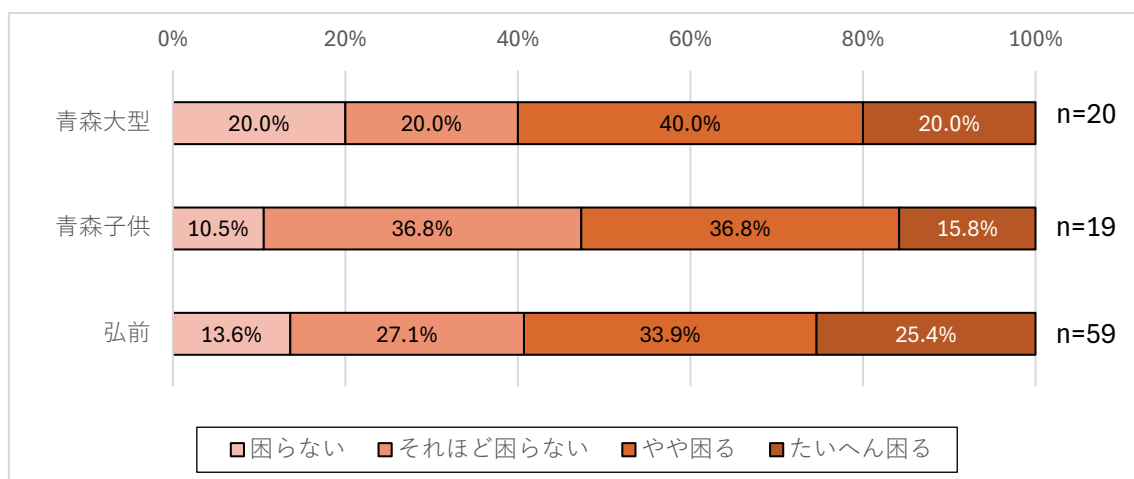


図 2-41 伝統を受け継ぐ若い人の確保に対する意識（田中 [1984] をもとに筆者作成）

(6) 自由回答の結果

今回の調査では、①現在の活動で工夫している事、②苦労している点、③今後取り組みたいことの3つの内容について自由記述欄を設けて尋ねた。

まず①については、34 団体から回答があったが、祭りの参加者や担い手の確保を目的としているものが多かった。特に団体外との交流や連携に関する取り組みが多く挙げられたが、その相手は幼稚園や学校、近隣町会、地域住民など多様であることが読み取れる。また、自団体の情報発信にも力を入れているようだ。また、ねぶた制作に関する活動も挙げられ、多くの人に興味を持ってもらえるような工夫がされている。子供たちへのお菓子の無料配布などの参加者が喜ぶような工夫が挙げられた（表 2-5）。

②については、40 団体から回答があったが、18 件が少子高齢化による後継者不足、13 件が人手不足、9 件が資金調達に関する内容だった。特に高齢化については、来年度の活動に支障が出るほど危機的状況にある団体も見受けられた。また、仕事との両立、20～30 代の

減少からは現役世代の祭りに対する負担感が推測できる。この他には、本体の制作・格納場所の確保が複数の団体から挙げられている(表 2-6)。

③については、①で挙げられた連携を維持、強化する意見が多く挙げた。また、これまでの連携を活かした新たな運行や合同運行への参加が模索されており、各団体の祭りの発展に向けた意欲がうかがえる。この他には、新しい担い手への継承を視野に入れた組織の改善や観光の側面を活かした取り組みが意見とした挙げた(表 2-7)。

表 2-5 団体として工夫している事

当会は組織に運営、制作、囃子、運行班があり、その上に事務局がある。会員は、全員が各班に入ってもらい、各班にも班長、副班長を立て、各班がやれることをやれるようにして、若手を育てている。
なるべく若い人たちに声をかけているが、地域ねぶたは子供が主体なので、自分の子供が大きくなると参加してくれなくなり世話役の老人ばかりです。しかし、小学校で有志の方が囃子(太鼓)の練習を週一でやってくれているので、なるべく子供たちに紹介している。
有志で活動しているのではなく、学生の授業の一環として必ず参加する仕組みを取っている
人集め(運営スタッフ)、引き手の確保(アルバイト) 囃子隊集め、継続する意志を保つこと、仲間を集めること
少子化により子供たちの参加者が少なくなってきたため、今年度はねぶた運行前に小学生を対象に、かき氷、やきとり、フランクフルトなどを無料で配布し、参加者を集めた。
近くの町会とも連絡して多くの世話人、子供が参加できるようにしている
町内外の子供たちに楽しんでもらうために実施しており、祭り終了時にお土産(少量のお菓子)を差し上げている
ねぶた本体の題材を2年に1回変えている
製作現場はいつでもオープンにして気軽に見学できるようにしている
ハネトとして参加する子供たちが喜ぶようなお土産(お菓子セット)を用意している。大人には「ふるまい」を少し豪華にしている。
代表の立場として人の話を聞き、なるべく要望をかなえてやる
小、中学校の総合学習にてねぶた学習(ねぶた師講話+金魚ねぶた製作)を実施。
伝統がない地域ねぶたのため、他の地域ねぶたの協力を基に開催する我々の地域ねぶたのやり方は特殊だと思いますが、このやり方を『伝統』としていきたい。
地元の保育園や小学校などの授業や講義、紙貼り体験会など。地元民に対象にした囃子練習会等。
外の町会、地域の交流を深めて互いに助け合う。例えば、それぞれのねぶたに参加したり、物品の貸借りをしている。
活動の際は、浦町小・中おやじの会が主体となっているが、子供が卒業したお父さん(OB)の皆さんにも協力してもらっている。
子供ねぶたという位置づけで活動しているため、参加してくれる子どもの親御さんに協力してもらってます。また、地域の中学生ボランティアにも参加してもらってます。
近隣の小学校や高校を訪問し、活動をアピールして人材確保
①囃子方の育成、新規加入を増やす丁寧な指導②運行スタッフの確保(高校、小学校との連携)(町会、周辺町会からの人的協力)(囃子方運行全般の自主性)
年間を通じて制作活動等を行い、先輩から後輩へ制作技術等を受け継ぐようにしている。
地域貢献事業としての位置付けの検討
他団体との交流
法令遵守、若手育成、地域との連携
年間を通しての交流
活動等の情報発信
SNS
地域のこども園等との連携、青年の育成
地域の方々とのコミュニケーション
経費削減
町会民との交流事業の継続と大学生徒の協力依頼
団員全員で制作(年齢問わず)

表 2-6 現在の活動における課題（少子高齢化：○、人手不足：△、資金不足：□）

30年の歴史を引き継いで3回目の出陣もずっとねぶたを制作してくれたねぶた師も今年で83歳。来年は無理だなと感じています。	○△
世話役の後継者不足、少子化による参加者不足	○△
参加者（特に教職員）が同じベクトルを向いていない。授業であることで強制力の高い活動になってしまうことは、継続力が維持される一方で、祭り本来の「楽しさ」が失われつつあると危惧している。	
人手不足、協力者が減っていること、参加者も減っていること	△
大人の参加者が少ない。町会班長さんをお願いしている。	△
ねぶた運行時のスタッフを集めることと現在ねぶた運行に携わっている方の年齢を考えるといつまでできるか不安です。	○
制作や保管場所の確保に苦労している	
現在は若い世話人も増えて盛り上がってきている。もっと若い人を増やしていきたい	
町会の役員が高齢化しているので、外部からの若い人たちの手伝いを募ってやっている。この状態でいつまで続くか疑問である。	○
後継者育成	○
後継者がいないこと。興味を持っている人が年々少なくなってきている。	○
町会の住民の多くが70代以上になっており、山車の引き手の確保に苦労している。	○
資金の確保、活動趣旨の拡散	□
地元民の参画、次世代育成。	○
人手と資金不足に苦労しています	□
会員が高齢化し、地域に若い人や子供がどんどん減少している。	○
一番の苦労は資金調達。一人で町会の企業や町会長を回り協賛金をお願いするのが大変で、集まるお金も減ってきている。	□
ねぶたは自主制作を継続しています。制作を受け継いでくれる方が今のところいません。制作陣もサラリーマンの為、制作時間が平日の夜になります。中高生で興味があっても部活・クラブ活動や塾などがあり中々参加できません。そして、制作活動をしてくれた子も高校卒業して県外進学・就職してしまいます。20代・30代の方の参加がほぼありません。会全体の存続が今後心配です。	○
曳手や運搬の人手不足（運行スタッフのマンパワー不足）	△
①資金集め②運行人員、ハネトの確保	△□
クラブ活動のため、その年によって入部する生徒に増減があるため、部員が少ない年は人手不足となり苦労も多くなり先行きに不安を感じるときもある。	
資金調達	□
準備、対応に関わる人手不足	△
若手の育成	○
高齢化	○
人口減少、少子高齢化	○△
会員の高齢化。若手の会員が増えない。	○
祭り自体の存続を危惧しています。兼ねてより運営費・運営スタッフについては参加団体が負担していますが、相次ぐ物価高騰による費用負担の増大（費用対効果の不透明）・少子高齢化による担い手の減少などにより、今の体制のままでは参加団体ばかりが負担を強いられていく事になります。このままでは、近い将来、撤退を余儀なくされる団体が出てくる事は必至と思われます。これは、わが社に至ってもその限りではありません。さらに言えば、こうした環境下のため、ねぶた師の収入（材料費を除いた収益）についても容易く上げる事は出来ません。	○△
一方で青森ねぶた祭は日本においてもトップクラスに注目度の高いキラコンテンツです。自治体やコンベンション協会などの主催団体や、市内の飲食店や小売店については祭りによる観光客の恩恵をダイレクトに受けている事でしょう。今後も青森ねぶた祭を継続、発展させていくためには、主催団体も共にこれらの問題に向き合い、参加団体ばかりが浪費していく仕組みを見直し、ねぶた祭のステークホルダー全体が改善される策を講じていく必要があると考えます。	
仕事との両立	
若手育成	○
人の確保、予算確保	△□
資金不足	□
日中ねぶた運搬時の人員確保	△
継承	○
担い手不足、地域リーダー不足	△
会員の増員	△
人員の確保（特に若者、後継者） 骨組みの修理、更新にかかる費用の捻出	○△□

小屋代の値上げ、備品格納場所の確保。	
経費、小屋探し	<input type="checkbox"/>

表 2-7 今後取り組みたいこと

次の会長、役員になる人のために苦勞、不安を少なくするような取り組みをして、若手に引き継いでもらえる組織づくりをする
観光コンベンション協会から新しいねぶたを購入する
継続して地域の伝統文化であるねぶたを若い世代に体験してもらう
まずは、今まで通り行っていく。規模は小さくても継続できれば良い
今後も引き続き運行していきたいと思います。
周年行事では合同運行に参加したい
3年に一度くらいは町会有志で自主的にねぶたを製作していきたい
当面は、現状維持で実施したい
近隣の町会を巻き込んで大規模な運行を一度でも経験してみたい
地元の中学校と連携し、中学生に引き手などを担ってもらっているので、中学校との結びつきを一層強くしていきたい。
合同運行の参加
今年から他の地域ねぶたとの連携を図ってきたが、表向きにも連携しているアピールができる形を見せていけるようにしたい。
十周年記念イベント。
他の地域ねぶたと違って観光の要素も含まれるので、ホテル・旅館と提携してイベント等で資金を稼げるようにしていきたい。
青森市地域ねぶた振興協議会の皆さんと協力し、青森市南地域をもっと盛り上げたいと思います。
関係団体との連携を充実させていく
活動の主体は生徒なので、その年によって計画等は未定です。
我が会は、小、中、高、大学生まで取り込み行っているが、ねぶたの展示場が2カ所くらい欲しいと考える。
一般ハネト、運行協力者の確保
被災地での運行
今年度実施した広域支援の継続
地域との交流
ねぶた本体の小型化
学校との連携連絡、近くの幼稚園との運行。若手参加の為の SNS 発信。

第5節 クロス集計の結果

(1)「運行団体の設立時期」×「運行団体の組織母体」

運行団体の組織母体の中では、企業が比較的早く、教育機関は各年代に分散している。また、町内会は組織母体の中で最も多いが、1960年代以降絶えず存在していることが分かる。

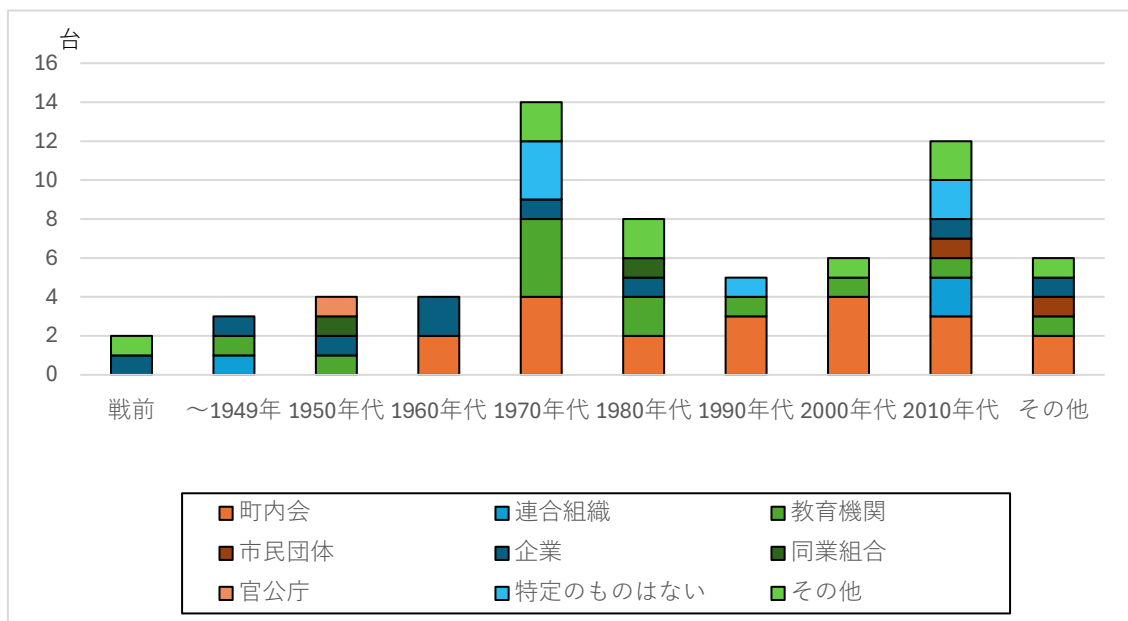


図 2-42 運行団体の設立時期と支持母体の関係

(2)「会員に占める支持母体の関係者数」×「県外や海外の人材の受け入れに対する意識」

会員に占める支持母体の関係者数の程度にかかわらず、外部からの人材の受け入れには肯定的である。そして、支持母体の関係者以外の人が多く含まれる団体では、反対意見は出ていない（図 2-43）。

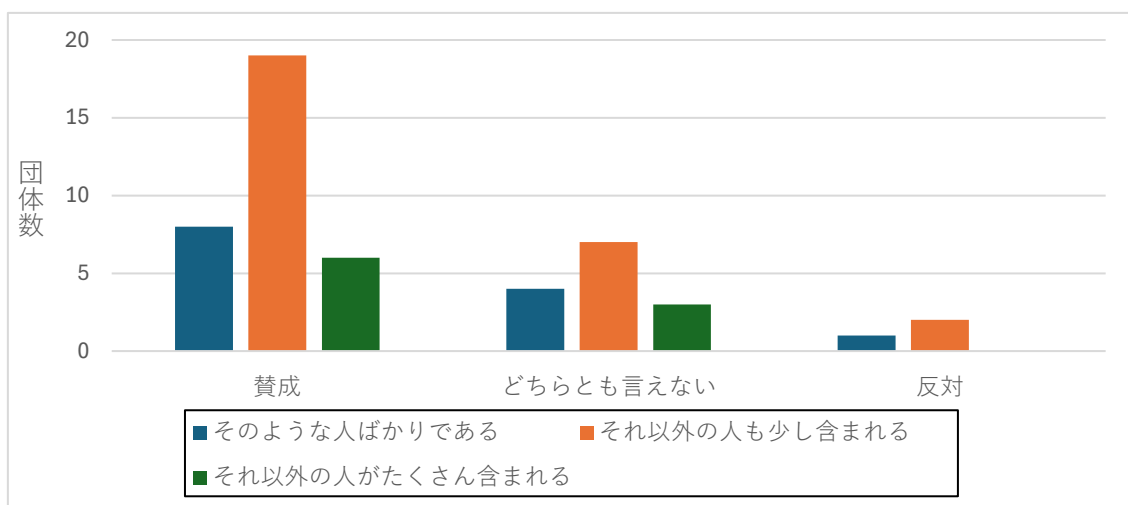


図 2-43 支持母体の関係者数と外部からの人材の受け入れに対する意識の関係

(3)「会員に占める支持母体の関係者数」×「県内のねぶた・ねぶた同士の交流に対する意識」

(2) の場合と同様に、会員に占める支持母体の関係者数の程度にかかわらず、ねぶた・ねぶた同士の交流には肯定的である。支持母体の関係者以外の人を多く含む団体は、専ら「賛成」だが、支持母体の関係者を中心とする団体は「賛成」と「どちらとも言えない」が拮抗している（図 2-44）。

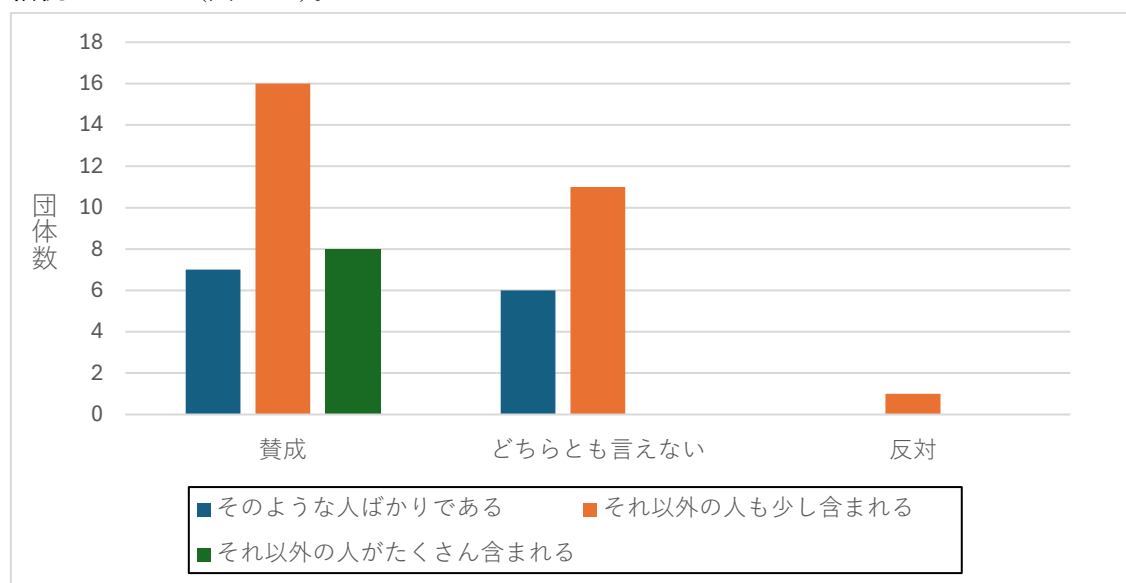


図 2-44 支持母体の関係者数とねぶた・ねぶた同士の交流に対する意識の関係性

(4)「祭りの伝統を重視することへの賛否」×「時代とともに変化することへの賛否」

2つの設問に対し、両者とも「どちらとも言えない」と回答する団体が最も多かった。ここから双方の意見を両立しようとする意図が読み取れる。また、これらの設問は、相反する意見であるものの、双方に賛成または双方に反対する団体もあった（図 2-45）。

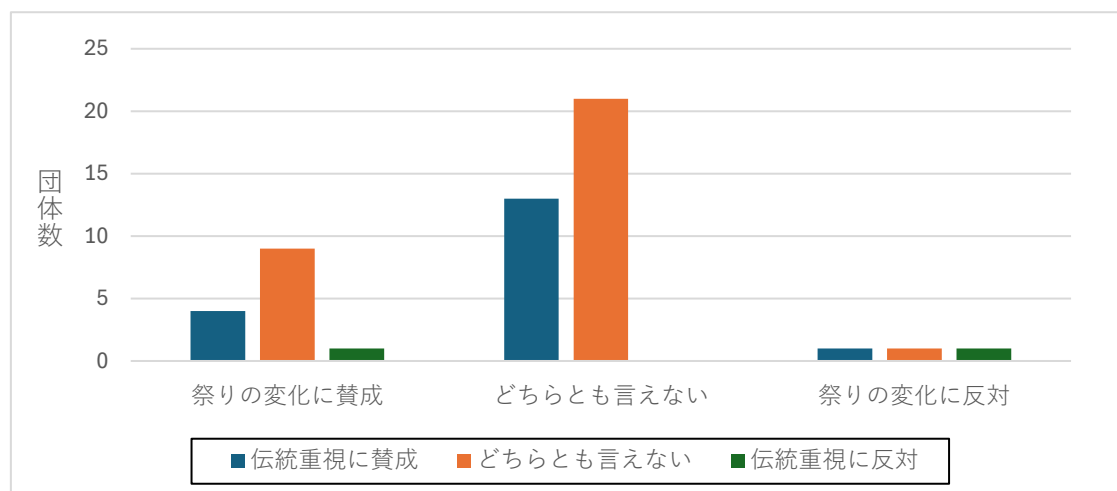


図 2-45 伝統重視への賛否と変化を求めることへの賛否の関係性

第6節 本章のまとめと考察

まず、実態調査の結果からは次のようなことが言える。会員の内訳や囃子手については、団体を越えた人的、技術的交流がさかんになっていることが明らかになった。また、ねぶた・ねぶた本体の制作、調達方法については、かつては各団体による自主制作が主流だった。しかし、現在は団体内での担い手不足に伴い、専門家への依頼や他団体から調達、前年の作品の再利用など手段が多様化している。祭り運行時の人数規模については、過去の調査と比較し100人未満の小規模の団体が増加し、200人以上の大規模の団体が減少していることが分かった。

運行の目的について、かつては地域間で意識の違いが目立たなかったが、現在は地域間で重要視する点に差が見られるようになった。また、祭りにあり方に対する意識に注目すると、かつては伝統の保持や制作に対する見方において賛否が分かれていたが、現在は、どのような見方に対しても反対意見が少なく、多様な価値観が容認されるようになってきた。また、地域を越えた交流や連携に関しては、各地域で賛同意見が優位となっていることが明らかになった。そして、意識調査を総合的にみると、最も観光化の影響を受けている青森市の大型ねぶたが、他地域と比較し保守的な意識を持っている傾向が明らかになった。

団体が工夫している活動については、多くの団体が他団体や学校、地域住民と連携することで担い手不足をはじめとする課題に対処していることが明らかになった。また、今後の活動においては、こうした工夫を維持、発展させ、さらに新たな運行形態を模索するなど、祭りの発展に向けた意欲が見られた。

団体が抱える課題については、資金や人材の面で以前より深刻度が増していることが分かった。また、地域や団体の規模にかかわらず、少子高齢化による担い手不足が団体の運営に悪影響を与えていることが明らかになった。

これらの調査結果を総合的に踏まえると、祭りの担い手不足が進行することで団体を越えた交流の必要性が高まってきたことが推測できる。また、実態に合わせて、各団体の考える祭りのあり方が変化してきていると判断できる。

第3章 祭りの担い手の新たな取り組み

第1節 本章の目的と方法

2章では、運行団体の実態や意識、課題について、各地域の傾向を把握することができた一方で、各団体の具体的取り組みとその過程については明らかになっていない。そこで本章では、運行団体および個人の新たな取り組みを把握することを目的とする。

調査方法は、以下の表3-1、3-2の通りである。

まず、運行団体については、地方紙や地元のニュースサイトに取り上げられた団体のうち、団体の運営において新しい取り組みが見られる3つの団体を選定し調査対象とした¹。また調査内容としては、共通の質問項目として主に祭りの参加者、資金の調達方法、ねぶた制作について伺っている。第2節では、各団体のヒアリング結果を項目毎に整理・記述した上で、それぞれの団体がおこなっている新たな取り組みやその工夫、課題などについてまとめる。

また、個人の調査対象については、前章で触れた団体や地域を越えた人的資源の交流を踏まえ、運行団体の枠組みを越えて活動している2名を選定した。第3節にて、それぞれの活動内容とその目的について触れる。

表 3-1 団体への調査の概要

団体名	さかえ立佞武多	ワンダーワンドねぶた会	子供人形ネプタ
対象地域	五所川原市	大鰐町	弘前市
対象者	会長のK氏ほか会員数名	団体の中心メンバー3人	代表のI氏
調査日時	2023年6月7、14、21、28日、7月7、12、19日（7回）	2023年9月23日 21：00～22：00	2024年9月4日 13：00～15：00
調査方法・内容	ヒアリング調査、参与観察	ヒアリング調査	ヒアリング調査
	①団体概要 ②資金調達の方法 ③参加者の動員方法、人数 ④ねぶたの制作方法		

¹ 東奥日報、陸奥新報、弘前経済新聞の情報を元に、団体を選定した。

表 3-2 個人へのヒアリング調査の概要

対象者	ねぶた絵師	青森市地域ねぶた振興協議会
調査時期	2023 年 7 月 9 日	2023 年 12 月 15 日
活動地域	弘前市、黒石市ほか	青森市
現在取り組んでいる活動	若手絵師の創作活動の支援	地域ねぶたの連携体制の構築
調査内容	①対象者の概要 ②ねぶた絵師の課題 ③団体と絵師との関係 ④今後の活動の構想	①団体概要 ②地域ねぶたの課題 ③団体の活動に関する構想 ④ねぶたと地域の関係

第 2 節 各団体の活動事例

(1) ワンダーワンドねぶた会 (大鰐町)

①団体概要

この団体は、大鰐町で町会単位の団体が減少する中で、子供たちの祭りに参加する機会を作るため、2023 年に設立された有志団体である。今回の調査では、団体の中心メンバーである Y 氏、S 氏、H 氏の 3 人に話を伺った。彼らは同町出身の幼馴染で、関東から U ターンし、飲食店を経営しながら地域活性化に向けた活動を行っている。

②資金の調達方法、③当日の参加者

団体設立に必要な資金は、主にクラウドファンディングと大鰐町の補助金で賄われている。クラウドファンディングは支援者数が 160 人、支援金額が約 140 万円集まった。また、町の補助金は 50 万円支給されている。祭り当日の参加者については、最大で約 60 名が集まった。

ここでは、資金調達と参加者の動きについて詳しく見ていく。Y 氏は、当日の参加者について次のように話す。

私たちは 4 日間、運行したんですけども、1 日目が一番多くて 60 人くらい参加してもらえました。その割合も (中略) クラウドファンディングの返礼品として参加できるよとか、そういうのも入れていたので町外の方も多くて。2 日目とかは 50 人、3 日目は 40 人くらいで、最終日は結構少ない人数で、子どもしかいなくてねぶた動かすのも大人手がけっこう必要だったりするのでギリギリで運行だけ何とかやったくらい

ではあったんですけど、最後まで運行はとりあえずできました。

このように、参加者の動員はクラウドファンディングと結び付ける工夫がされている。一方、参加日によって人数に差があることが課題として挙げられている。

団体の資金集めをはじめとする活動が順調に進んだ背景について、Y氏は以下のように話す。

店を1年近く経営してきたのがけっこう大きいと思っていて、このお店をやっているから僕たち3人のことを知ってくれているという方がいっぱいいたので、そういう方にもクラウドファンディングで支援をお願いしたりとかもしてたので、知らない人が頑張っているよりも、知ってる身近な人が頑張っている方が皆さん応援しやすいというのは、あったのかなと思います。

8割くらいは、知り合いのつながりだったので、本当に全く知らないという人はほぼいないという感じだったので。

彼らの日常的な飲食店経営を媒介とした地元住民との交流が団体の活動に必要な資金と協力者の拡大につながっている。そして、団体の運営に必要な各要素を相互に関連させながら確保して活動を進めるとともに、自身や顧客のコミュニティを有効に活用している。

④ねぶたの制作方法

ねぶた絵の制作は、同町出身の若手絵師に依頼したが、これに加えてクラウドファンディング協力者には返礼品としてねぶた絵に手形を入れもらう機会を提供し、20名以上が参加している。設立段階で必要な物資について、ねぶたの骨組みや太鼓を大鰐町内で現在参加していない団体から借用している。

(2) 子供人形ネプタ (弘前市)

①団体概要

この団体は、ねぶたを通した子供たちの思い出づくりを目的に、団体の代表I氏が小中学校の同級生数人とともに2024年に新たに結成した団体である。特定の支持母体を持たない有志団体だが、彼らの母校である市内の小学校周辺で活動している。また、弘前市の団体としては数少ない組ねぶたの団体である。調査では、団体の代表であるI氏に話を伺った。

②資金調達の方法

資金調達については、協力者の自主的な支援によって成り立っているが、詳しい状況について次のように語っている。

出陣祝みたいなので14万くらい集まったのかな。それに奨励金とか加えて30万も稼いでねえんだよな。それで出費200万だよ。それ以上かかっている。まあ、初期投資だと思ってる。

(中略)

普通のねぶた団体なら足場で小屋建てて、リースなんだって。ただ、足場の業者って小屋の側面しか作ってくれない。屋根だの(とか)自分でやんねばまいねし。リースだから返さないといけないじゃん。毎年2、30万かかれば大変だから、単管(パイプ)買ってやったから、来年は単管代はかからないけれど。

小屋建てる方が大変。その小屋が早く建たないと(ねぶたを)作られないしさ。わんど6月中旬くらいに小屋完成して、雨漏りとかしてさ。

小学校の隣にばっちゃん(祖母)の畑あって、そこに建てた。下が土だから砂利買って敷いて。

(中略)

小屋作っても、雨漏りして直すはんで(から)、毎週のように10万ずつ飛んでいったって感じ。

仮設小屋の設置にあたって、大きな経済的負担が伴っていることが分かる。そのため、この団体では今後の出費を考慮し、小屋の資材を購入している。

年寄りや、寄付もらって歩がなか(歩いた方がよい)って言うんだよ、簡単に。でも、今はねぶたに興味ないからね。まず、インターホン押しても出て来ないべ(来ないでしょ)。今、町内運行やっても家から出て来ないもん。

このように、初参加に際してより多くの人の協力を得るために、周囲に経済的負担を強要しないように気を遣っているようだった。また、各家庭からの寄付のような従来の調達方法の限界にも触れている。

③当日の参加者

祭り当日の参加者の動員に関しては、母校の小学校に全校分のチラシを配布し、初日は親子連れ約80名が参加した。この団体では町会の枠組みを越えた、自由な参加を認めている。当日は飛び入りで参加する人もいたようで、I氏は次のように話す。

出たい人はいっぱいいるんだよ、でも出方分かんない。町内のねぶただったら、他の町内の人はどうやって申し込めばいいのか、分かんない。だから、有志団体で好きな人が出られるようにしたんだよ。

子ども出れば、意外と親も一緒に出て楽しんでる。そこからどんどん人が増えた。
当日も、「私も出たいです。」「友達から聞きました」という人も多くいた。

先述したように、この団体では小学校を中心に参加者を募っており、祭り当日の囃子については、以下のように語っている。

小学校1年生から太鼓やらせてるからな。全然聞こえないけど。

子供たちはさ、経験が全部財産になるから、大人になってから。

「小さいとき、大きい太鼓叩いたんだよ」って。

基本、やりたいことやらせてるからな。

(中略)

笛は大人たちでやろうと考えてたんだけど、(中略) 小学校でねぶたの行事あって4年生から笛習うんだよ。6年生だば(だったら)、たげ(かなり)笛吹けるから、太鼓やる子たちにも笛持ってこさせて、やらせてた。

弘前市の合同運行では、囃子演奏は団体ごとに評価されるため一定の技能が求められる。しかし、この団体では子供たちの技量や意志を尊重し、参加者の一員として役割を果たせるように関わっていることが読み取れる。

このように、この団体では参加の条件を簡素化したうえで、子供たちが参加者の一員として活躍できるような体制の構築に努めている。

④ねぶたの制作方法、物資の調達

ねぶた制作については、I氏が職場でねぶた制作の経験があり、人形部分の骨組み、電気配線等はI氏を中心に行われた。紙貼り作業は、I氏の職場関係者や知人を中心に行われた。また、団体の設立に必要な物資について、祭りで使用する太鼓は大鰐町の団体から借用している。

(3) さかえ立倭武多(五所川原市)

①団体概要

この団体は、2000年、市内旧栄地区の町会を中心に設立された五所川原市内で最大規模の有志団体である。市内の小学校を拠点として活動しており、参加者は主に囃子手と踊り手の2つに分かれている。団体の活動実態を把握するため、2023年、6～7月の約2ヶ月間、7回活動場所を訪ね、囃子や踊りの練習、制作小屋の参与観察および会員へヒアリング調査を行った。

②活動の参加者

祭りの参加者は約 120 人となっている。会長の K 氏によると、設立して数年後には約 700 人が参加していたが、減少傾向が続いているそうだ。現在の参加者の実態については、以下のように話す。

団体の課題は、高齢化。特に 20、30 代が少ない。子どもは、親が同伴しているうちは来るけど、学年が上がると自分の意思で参加しないね。

昔は部活帰り、そのままの服でよく（練習に）来てたんだけど、今は部活が断る理由だからね。

また、踊り手の参加者の一人も次のように話す。

募集しても新しい人がなかなか入らない。

もともとは子供たちと一緒に来てたんだけど、いつの間にか親だけが残った感じかな。子供たちは（コロナ禍で）3 年過ぎると、バラバラでどこにいるか分からない。

（中略）

参加したいっていう声は聞くけど、そういう人たちってどれくらいいるのか分からないしね。私たちは全然ウェルカムなんだけど。

このように、会員は子供たちの参加者が減少していることを特に気にしていた。参加者の減少は台車の引き手不足につながっており、対策として市内に会員募集のチラシを掲示していた。

参与観察によると、平日の囃子練習には毎回約 50 名が参加していた。そのうち約半数が子供で未就学児も 10 名ほど含まれている。K 氏曰く、休日の練習日は比較的参加者が多いとのことだった。

③資金調達

活動に必要な資金は、会費のほか約 200 件の協賛金や寄付で賄われていたが、2023 年からは従来の方式に加え、クラウドファンディングが新しく用いられた。これは、会員減少に伴う会費の減少や老朽化した台車の整備を考慮し、地域外から幅広い協力を得る目的がある。目標金額 100 万円に対し、最終的な支援総額は 13 万円、支援者は 17 名となった。

④ねぶたの制作方法

ねぶたの制作に関しては、題材やデザインを考え骨組みを主に担う制作者を中心に会員が自由に参加している。6 月初旬から人形部分の紙貼り作業が始まる。色塗り作業は小さ

な子供たちから参加できるようにしている。制作小屋は、活動場所の小学校の敷地内に設置されており、囃子の練習と並行して活動が行える体制が整っている。

⑤ 参与観察を通して明らかになった活動

活動を通して見えてきたことは、会員間の多様な交流である。囃子の練習では、世代間の交流が活発になり、新しい参加者に対する周囲の積極的なサポートも確認できた。また、未就学児の保護者同士がコミュニケーションをとる姿が多く見られた。前章では、囃子の練習について、祭りに向けて会員の交流を図る機会と述べたが、一人ひとりが相互に関わり合う中で祭り独自のコミュニティが形成させていくことが確認できた。特に子供たちへのアプローチを丁寧に行っており、保育士として働いている会員が中心となって工夫した練習を進めていた。

第3節 運行団体を越えて活動する人たち

(1) ねぶた絵師

① 対象者の概要

前章で述べた通り、各団体で運行するねぶた・ねぶたは、ねぶた師やねぶた絵師と呼ばれる制作者へ依頼することが増加している。特に弘前市に代表されるような扇ねぶたを運行する地域では、ねぶた絵師は必要不可欠な存在である。そこで、絵師の祭りに対する意識や運行団体との関係性を把握するため、弘前市や黒石市を中心に活躍するねぶた絵師のJ氏にヒアリング調査を行った。

J氏は、新しい取り組みとして、若手絵師および絵師を目指す子供たちの支援を行っている。具体的には、若手絵師約30人がかかわる共同制作プロジェクトを企画や、自身の展覧会における小中学生の作品の展示が挙げられる。

② ねぶた絵師の課題

ねぶた絵師を取り巻く課題について次のように話している。

絵師の下積みは前ねぶたなのよ。それで今までは自然とつながってきた。でも、今は団体が減ってきて若手の見せ場がない。だから、若い人を掘り起こさないといけないんだけど、(中略)もう流派とか団体の枠にとらわれてる時代じゃない。

このように、J氏は若手の絵師が成長するかつての環境と現在の違いに触れ、主体的に次世代の育成に取り組まなければならないと考えている。

③運行団体との関係

また、運行団体に対する考えについて、次のように話す。

コロナで休んだ3年のうちに会のなかでも人が亡くなって、子どもも地元から離れてる。だはんで（だから）、今頑張って活動しても効果を見込めない団体は解散してしまうよな。

（中略）

でも、絵師は基本、会の活動には口出しできない。

（中略）

ねぶたはお金じゃない。団体によって材料費とかいろいろ都合あるけど、なるべく応えるようにしてる。（団体から）頼まれるから絵師は生かされてるんだもん。

このように、団体の活動に直接介入できない自身の立場を理解しつつ、絵師としての役割を果たそうとする考えが読み取れる。

④今後の活動の構想

今後の祭りのあり方については、制作者の一人として「見せるねぶた」をすることで、祭りから離れた人を呼び戻したいと考えている。また、ねぶたを作れない団体のために絵師がねぶたを準備し、必要に応じて貸し出す「レンタルねぶた」の仕組みを構築しようと考えている。

前節の運行団体の事例でも述べたが、近年は子どもを中心に祭り離れが進行しており、G氏はこうした状況に対する活動を模索している事が分かる。また、運行団体が制作の負担を負うことが難しくなる中で、制作者の立場から祭りの維持に貢献しようとする姿勢が読み取れる。

（２）青森市地域ねぶた振興協議会 会長

①団体概要

青森市の地域ねぶたは、町会などが主体となって各団体が独自で運行しているが、ねぶたの制作者や参加者、資金面において課題に直面している。こうした状況のなか、2024年3月には市内の高田、荒川、横内、幸畑の4地区の有志により、「青森市地域ねぶた振興協議会」が発足した。ねぶたの貸し出しや人材派遣などの支援体制を構築し、他地区にも広げていく計画だ。

現在、運行団体間の連携を推進する組織として、青森市には主に大型ねぶたの団体で構成される「青森ねぶた運行団体協議会」、弘前市には「弘前ねぶた参加団体協議会」があり、どちらも市内の合同運行を前提として存在している。そのため、合同運行を必須としない地域ねぶたで団体間の連携機関が発足するのは新たな試みである。

上記のような組織の設立も踏まえ、実態をより詳しく把握するため、協議会の会長を務める G 氏にヒアリング調査を行った。この調査の時点では、組織の設立の準備段階だったが、協議会の設立のきっかけとなった地域ねぶたの課題、活動の計画、地域ねぶたに関わる中で大切にしている点について伺っている。

②地域ねぶたの課題

まず、地域ねぶたの課題について、G 氏は次のように述べている。

各地域、人手が足りないわけよ、人が足りない。そういう問題がまず 1 つ凄く根底にあるわけ。おじいちゃんとかになかなかさ、重い仕事大変じゃん、腰痛いとかさ。地元の 40, 50 代までで動ける人で協力してくれる人が少ない。高齢化しちゃってるわけよ。組織自体もそうなの。次継ぐ後釜がないわけよ。

(中略)

それに、町会の括り、自治というのが崩れ始めている。

若い人は、町会に冷めている。何のためにやっているのって思っている。

各地域で高齢化が進行し、祭りの担い手や後継者が不足している。そして、地域ねぶたの支持基盤である町会が衰退することで祭りの実施が難しくなっている。

③協議会の活動の構想

上記の課題をふまえ、協議会の活動の方向性について次のように語っている。

高田(地区)で何とかならないなら荒川(地区)と組まないといけないし、連携して人を回す訳よ、日にちが違うから。引き手で支援に行ったり、幸畑(地区)で囃子やる人たちが横内(地区)にも支援に行ったり、荒川のねぶた作ってる人が、横内のネブタ作ってやったりとか、もしくはそれを貸したり。

(ねぶたを)借りるのはプライドが許さないとかそういうのやめようよ。本当に残したいならちゃんとエリア構成して、そういう風に考えてるの。

ねぶた足りないならどうするかというと、ワ・ラッセにある若手のねぶたをあまり活用されてないので、地域ねぶたに運行させるといふ。そうすると若手が「俺のねぶた運行されるぞ」ってテンション上がって見に来るわけ。(地域の人から)支援者も出てくる。

(中略)

あと、(ねぶたの)運搬にかかる費用は市の補助金で賄えるように協議会が要請するかたちをとりたい。

このように、祭りに必要な人員とねぶた本体を共有していくことで、団体の運営を支援し

ていこうと考えている。特にねぶた本体については、各地域内でねぶたを制作できなくなった場合、協議会が各団体の要望に応じて貸し出しの仲介を担うが、彼は若手の育成にもつながるような取り組みを模索している。また、必要な経費については、行政機関と連携することで、団体の負担軽減にもつなげていく考えだ。

④ねぶたと地域との関係性

地域ねぶたに関わるなかで大切にしていることについて次のように話す。

地域の人が絡んでないで「ねぶた見ろ」って見せつけるねぶたは、地域ねぶたではない。地域の人がある程度絡んで、それで地域のねぶたなわけだから、借りたねぶたでも提灯は地元の企業の提灯が入って、地元の人が出てきて見て拍手して、そういう地域の賑わいを創出するのが目的でないと。

地域ねぶたの運行団体は各地域と密接に関わりながら成立しており、その存続にあたっては祭りのみならず地域の振興を視野に入れることも重視されている。そして、協議会の活動が押しつけではなく、あくまでも各地域に沿った方法で行われることを大切にしている。

また G 氏は、自身が深く関わっている高田地区の地域ねぶたと伝統芸能の関係性について次のように語っている。

地域の問題はねぶただけでないのよ。ねぶた自体もそうなんだけど例えば神社関係の縄編んだりとか、獅子踊り、獅子舞とかも連鎖して全部やばい。それが地域の賑わいっていうのが各地域にあるわけ。昔から残る風習もいっぱいあるんだけど、それが今危機的状況。何を優先しますかっていうときに、一番手っ取り早いのがねぶたなのよ。みんな誰でも参加できるし。ただ、獅子踊り、獅子舞ってなると例えば、その地域の長男でねばまいねとか、いろんなものがあって。風習って言うの。(こういう縛りがあれば)当然人口減って高齢化率高くなれば、もういなくなるのよ。いなくなっても地元でねばまいねってなれば、もうなくなる。

高田は、地域ねぶたの高田ねぶたから高田獅子踊りも人が集まったりとか、そういう風に盛り上がり、賑わいが創出されて地域の人たちが絡んでくると、そこではじめて関わり合いが出てくる訳よ。高田ねぶたを通して「おめ、獅子踊りやんねが」「ああ、別にいいけど」みたいな、そういうきっかけができる。

このように、地域ねぶたは、他の伝統芸能と関わりながら地域コミュニティの再生と活性化において重要な役割を果たしている。

第4節 本章のまとめ

各団体や個人の活動を整理すると、次のようなことが言える。

まず、大鰐町の団体は、クラウドファンディングを資金調達的手段で終わらせず、制作活動の協力や参加者の動員にも活用した。そして、これらの活動には団体の中心メンバーが地域で活動する中で築いてきた人脈が活用されている。このことから、祭りが一時的な活動ではなく、地域住民の協力の上に成り立っていることが示されている。

弘前市の団体は、有志団体として地域の子供たちを積極的に受け入れることで、町会にとらわれない新たな参加形式を構築しようとしていた。資金調達の面では個人の持ち出しが大きく、経済的基盤が安定していないことが課題として挙げられる。

五所川原市の団体は、地域の経済的基盤の縮小に対処するため、クラウドファンディングを始め、地域外からの支援の拡充に努めている。また、囃子練習をはじめとする活動では、子供たちの視点に合わせた工夫が随所に施されていた。

ねぶた絵師の活動については、流派や団体を越えて若手絵師の交流、活躍の機会を提供し、担い手の育成に力を入れていたことが注目すべき点である。

青森市の地域ねぶたでは、町会の衰退、担い手不足の課題に対処するため、協議会を設立し、各団体や地域の連携を強化していく動きが見られた。これは、合同運行を前提とした従来の協議会と異なり、人材や物資の共有による地域ねぶたの維持が大きな役割として挙げられる。

調査対象の3つの運行団体については、有志団体として従来の町会や組織の枠組みにとらわれない参加者の獲得を目指している点で共通している。しかし、協力や支援に関する発信の方法や程度は団体によって異なり、特に資金調達の面に差が見られる。例えば、弘前市の団体は参加者の負担を抑えるため、支援の依頼は最小限に留めている一方、他の2団体は活動内容を積極的に発信することで幅広い協力を得ようとしていた。特にクラウドファンディングに関しては、広い範囲から支援を得られるため、資金調達のために活用されていたが、団体によって結果に差が生じている。先述したように、大鰐町のクラウドファンディングの成功は地域のコミュニティや付き合いが根底にあり、それが団体を支える人材の確保につながっている。このことから、団体の運営は、日常のコミュニティを基盤として成り立っていることが判断できる。

新規団体の設立にあたっては、ともに他団体から台車や太鼓の協力を得ており、地域の人口減少に伴って町会ごとの参加が減少する中、残された資源が新たに継承されていることが読み取れるが、これは地域ねぶたの協議会の役割にもつながっている。つまり、この協議会は、これまで各団体が独自で行ってきた外部との人や物資の交流を仲介し、地域ねぶた全体の体制の維持に貢献すること期待される。

第4章 考察

第1節 本章の目的

本章では、これまでの調査結果をもとに、ねぶた・ねぶた祭りの特徴の分析を行い、今後の継承のあり方を明らかにすることを目的とする。

第2節 これまでの調査結果の整理

2章では、運行団体の実態、意識、課題から、以下の点が明らかになった。

まず、団体の設立については、一度途絶えた町会のねぶたが他団体や関係機関の協力のもとで復活した事例があり、時代の変化に対応していることが示された。会員や当日の参加者の内訳からは、団体の枠組みを越えた交流や連携が以前より活発化する傾向が見られた。また、それらの活動の方向性は、他団体や学校、近隣町会、地域住民など多様であることが明らかになった。

運行の目的については、各地域で重視する点に多少の差が見られるが、地域との関係が深いほど子供たちに対する意識が強い傾向が見られた。また、祭りのあり方に対する意識については、実態を反映しながら複数の理想像を併存させるように変化してきた。

現状の課題については、多くの団体に共通して少子高齢化による担い手不足が深刻化しており、次年度の運行に関わるほどの危機的状況も見受けられた。その一方、今後の活動に関しては、現状維持にとどまらず、新たな活動を模索する動きが見られ、祭りの発展に向けた意欲がうかがえた。

3章では、運行団体、個人の具体的な活動内容から、新たな取り組みの成果と課題を明らかにした。大鰐町の団体では、クラウドファンディングを資金調達のみならず、制作活動の協力や参加者の動員にも活用した動きが見られた。そして、この活動からは、日常的な人的交流が団体の安定的な運営につながる事が明らかになった。また、弘前市の団体では、既存のコミュニティにこだわらない参加形式を構築し、地域の子供たちを積極的に受け入れることで動きが明らかになった。

青森市の地域ねぶたにおいては、町会の衰退、担い手不足の課題に対処するため、各団体や地域の連携を強化する新たなコミュニティが形成された。この活動は、各コミュニティの特性を維持し活用することが目指されていた。

運行団体を越えて活動するねぶた絵師の活動からは、絵師同士の交流や担い手育成の新たな取り組みが明らかになった。また、制作者の立場から運行団体を支え、主体的に祭りの維持、発展に貢献しようとする姿勢が読み取れた。

第3節 総合的考察

以上の調査結果を踏まえると、ねぶた・ねぶた祭りの継承、発展に関し重要な要素として以下の点が挙げられる。

まずは、新しい担い手の受容である。2章で述べた通り、運行団体の設立は時代を通じて継続的に起こっており、ここから、新規参入者や新たなコミュニティが祭りの担い手として形成、受容されていることが示されている。また、3章で取り上げた新規団体もコロナ禍後に若手を中心に発足したものだ。このように、ねぶた・ねぶた祭は広く門戸が開放されていることで、少子高齢化が進行する地域社会においても、祭りが幅広い人材によって継承される可能性を持っている。

2つ目は、多様な価値観の容認である。2章で見た運行団体への意識調査において祭りのあり方に対する意見の柔軟化が示されたが、これは既存の価値観を否定するものではなく複数の異なる見方を共存させるものだった。こうした傾向は、新たな担い手やコミュニティの受容に対応するものであるが、運行団体の活動にも反映されている。例えば、地域ねぶたでは、担い手不足によりねぶた本体の制作の専門化、中古品の再利用を容認する傾向が進んでいるが、一部の団体では自主制作への転換が試みられている。このように、伝統的視点と新たな視点が融合することで、祭りは独自に発展することが見込まれる。

3つ目は、複数のコミュニティをめぐる多様な交流、連携である。祭りは運行団体を中心とするコミュニティにより担われるが、それらは単独で存在するのではなく複数のコミュニティとの連携によって成り立っている。かつて祭りを支えてきた町会をはじめとする地縁が衰退した現在、新たな体制の構築が求められている。そして、運行団体をつなぐコミュニティが重要な役割を果たしている。例えば、青森市の地域ねぶたにおいては、団体間の連携を目的とする協議会の形成によって各団体の活動が活性化されようとしている。また、運行団体の設立においては、日常的な人的交流も有効であることが明らかになった。そして、各コミュニティは自身の維持にとどまらず、様々なコミュニティと相互に関連するなかで共存し祭りの維持、発展に寄与している。

このように、ねぶた・ねぶた祭りは変容の可能性を持っており、実際に様々な取り組みがなされている。そして、これらは伝統や形式にとらわれた受動的なはたらきではなく、担い手自身が祭りをより良く変えたいと思う意志から生まれる主体的なはたらきであり、それらの意志と行動が連鎖することで祭りは継承、発展していくものと考えられる。

終章

第1節 本研究の要約と結論

本研究では、ねぶた・ねぶた祭りに関わるコミュニティの実態と展望について、運行団体、個人の調査をもとに検討した。

まず、運行団体を対象にした質問票調査からは、その実態、意識、課題について検討した。そして、時代を通して行われてきた団体外との連携や交流が、少子高齢化や地縁の弱体化により祭りの担い手不足といった課題に対応し、より活発になることが明らかになった。また、各団体の連携、交流のあり方は多様化し、新たな祭りを再構築するきっかけとなっている。そして、意識調査からは、各団体の考える祭りのあり方が実態の変化に伴い多様化し、地域間による差異も示された。

運行団体の新たな取り組みからは、従来の町会や組織の枠組みにとらわれない人材や資源の獲得を目指していることが明らかになった。そして、日常における人的交流が団体の運営を安定化させることが示された。また、弘前市の新規団体の事例からは、新しいコミュニティのなかで、伝統的な価値観を守りながら活動する動きが見られた。運行団体を越えて活動する組織や個人については、2つの事例から新たな取り組みの可能性を検討した。まず、各団体のねぶた制作を担う専門家は、自身が属する制作者のコミュニティを再構成し担い手の育成に力を入れていることが明らかになった。また、青森市の地域ねぶたでは、地縁の衰退に対処するため、新たに発足した協議会を中心に各団体や地域の連携を強化していく動きが見られ、人材や物資の共有による地域ねぶたの維持が図られている。

よって、ねぶた・ねぶた祭りを支えるコミュニティの展望は、以下のようにまとめることができる。

ねぶた・ねぶた祭りは、新しい担い手と多様な価値観を受容し、既存のコミュニティを越えた多様な連携、交流を生み出している。また、これに伴い祭りに関わるコミュニティの新たな形成や再構築も進んでおり、これらの取り組みは、現状の課題を克服する手段にとどまらず、祭りが今後も継承、発展していく可能性を広げるものである。そして、祭りの担い手は主体的な意志によってコミュニティを変化させ、ねぶた・ねぶた祭りを次世代に継承するものである。

第2節 今後の課題

今後の研究課題としては、以下の点が挙げられる。

まず、本研究は、主にねぶた・ねぶた祭りに参加する運行団体を調査対象としてもものであり、コミュニティの持つ課題や効果を見出すことはできたが、祭りにおける地域住民の意識や役割について十分に究明されていない。また、調査対象が一部の地域に限定され、各地域の特徴や地域間の関係性について具体的な考察までには至らなかった。祭りを取り巻く環境は今後も変化し続けると考えられる。そのため、今後も祭りの継承と発展に向けて、新たな課題に向き合い、具体的な取り組みを模索していきたい。

参考文献

- ・阿南透（2003）「青森ねぶたの現代的変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』103,263-298
- ・阿南透（2018）「高度経済成長期における都市祭礼の衰退と復活」『国立歴史民俗博物館研究報告』207,223-252
- ・池上良正（1986）「ネブタの文化」弘前大学人文学部人間行動コース編『人間行動研究 I ネブタ祭り調査報告書－文化・社会・行動』
- ・小山隆秀（2024）「コロナ禍を乗り越えていく民俗－青森県弘前市のねぶたを事例として－」『青森県立郷土館研究紀要』48,119-128
- ・金 賢貞（2006）「都市祭礼におけるヨソモノの存在とその意義--茨城県石岡市常陸国總社宮大祭を事例に」『日本民俗学』246,1-30
- ・坂本優紀・石坂愛・武智玖海人・周安琪・岩井優祈・篠原弘樹・白奕佳・松井圭介（2018）「地方都市における祭礼の変容－土浦八坂神社祇園祭における氏子の対応に着目して－」『地域研究年報』40,51-74
- ・佐々木てる（2016）「2015 年度 青森学術文化振興財団事業報告書：青森地域ねぶたの現在とその可能性」青森大学社会学部佐々木研究室
- ・佐々木てる（2024）「2023 年度 公益財団法人青森学術文化振興財団事業調査報告書：地域ねぶたの活用と地域活性化 ～青森市の地域ねぶたの存続と市外地域への活用～」青森公立大学佐々木研究室
- ・佐藤弘隆（2016）「京都祇園祭の山鉾行事における運営基盤の再構築－現代都市における祭礼の継承」『人文地理』68(3),273-296
- ・武田俊輔（2016）「都市祭礼における社会関係資本の活用と顕示－長浜曳山祭における若衆たちの資金調達プロセスを手がかりとして－」『フォーラム現代社会学』15,18-31
- ・立田健太・大谷良光・大野絵美（2009）「青森ねぶた運行団体と子ども・学校との関わりの実際 ～大型・子ども・地域ねぶた運行団体を対象とした調査～」『弘前大学教育学部紀要』102,115-124
- ・田中重好（1986）「都市祭礼としてのネブタ祭り」弘前大学人文学部人間行動コース編『人間行動研究 I ネブタ祭り調査報告書－文化・社会・行動－』
- ・田中重好（2007）『共同性の地域社会学 祭り・雪処理・交通・災害』ハーベスト社
- ・中野紀和（1996）「都市祭礼における流動層－小倉祇園太鼓を事例として－」『日本民俗学』205,31-69
- ・成田敏（2016a）「県内の主なねぶた・ねぶた祭り」宮田登・小松和彦編『青森ねぶた誌 増補版』青森市
- ・成田敏（2016b）「青森ねぶたの形態とそれを支えた人々」宮田登・小松和彦編『青森ねぶた誌 増補版』青森市

- ・樋口博美（2014）「伝統的都市の祭礼にみる共同性の維持と創造 ―山鉾祭礼の“祭縁”を事例として―」『社会関係資本研究論集』5,129-149
- ・弘前市（2019）『弘前ねぶた本』
- ・弘前大学人文学部人間行動コース編（1986）『人間行動研究Ⅰ ネブタ祭り調査報告書―文化・社会・行動―』
- ・三浦俊一・大谷良光・立田健太（2009）「弘前ねぶた祭り運行団体と子ども・学校との関わりの現状と意識」『弘前大学教育学部紀要』102,125-132
- ・三浦俊一（2016）「芸術表現活動による経験の共有―「弘前ねぶたまつり」に見る文化資本の形成過程」山田浩之編著『都市祭礼文化の継承と変容を考える ―ソーシャル・キャピタルと文化資本』ミネルヴァ書房
- ・安田俊夫『弘前ねぶた速報ガイド』路上社（2019～2024 年）
- ・手を携え伝統紡ぐ 地域ねぶた存続へ効果は 青森 高田地区で運行 荒川、横内、幸畑参加 山車や人手を融通「東奥日報」 2024 年 6 月 30 日 p 21
- ・つなぐ地域ねぶた 青森／「人材不足」「資金調達」課題 地域ねぶた 青公大が運行団体調査「東奥日報」2024 年 7 月 3 日 p 25
- ・住民参加型まちづくり事業 大鰐町ホームページ
<http://www.town.owani.lg.jp/index.cfm/7,9102,88,html>（最終閲覧日：2025 年 1 月 7 日）
- ・青森ねぶた祭 オフィシャルサイト アーカイブ
<https://www.nebuta.jp/archive/>（最終閲覧日：2025 年 1 月 25 日）
- ・コモンエイジ：祭りの「消滅」100 件超す 都道府県の無形民俗文化財アンケート | 毎日新聞
<https://mainichi.jp/articles/20241104/k00/00m/040/184000c>（最終閲覧日：2025 年 1 月 20 日）